

萩原朔太郎『氷島』の抒情構造

——「構成」と「成立」を通して——

今西幹一

萩原朔太郎は必ずしも多作力行の詩人ではない。诗情溢出して止まない詩人でもない。北原白秋への師事、兄事の時代、朔太郎と並び立つた室生犀星の生涯に互る膨大な詩と比較すれば明らかである。<sup>(1)</sup>その詩的生涯は文芸的目覚めの前橋中学二年生時・明治三十五年の六篇の詩制作をから数えても、また白秋詩に傾倒してその「朱鸞」に掲げられた「みちゆき」五篇によつて中央詩壇に顔見世した大正二年から数えても、生涯を閉じる昭和十七年までの四十年ないし二十九年間に、詩集収録詩二九九篇、詩集未収録のもの一四四篇（全集第三卷「拾遺詩篇」）、加えて習作群、未発表詩が三四百篇ある。決して少ないとは言えない。<sup>(2)</sup>しかもその詩篇の制作は、昭和九年の『氷島』刊行を境にほぼ熄んでいて、その詩的生涯は更に短縮されるのである。

それでいて「多作力行」の印象を受けないのは、初期の一時期、たとえば「浄罪詩篇」に代表される時期に集中しての量産を窺えもするが、その間の複次に互る「ノート」、また『月に吠える』期の草稿ノートを観ても、その工房での詩一篇一篇の難産が思わせられる。更にまた『月に吠える』、『青猫』と詩集として集約された時期においても詩作の中断期、空白期を抱え込んでおり（これはひとり朔太郎に限らぬことであるが）、特に朔太郎においては、この中断、停滞は詩的生涯に互つて繰返されるのである。その因は、転々としたその学業に象徴されるように生来の持続力の欠如、ありていに言えば怠け性に由来し、また別の関心、つまり音楽・マンドリン演奏への傾注による、詩と音楽双方への情熱の時期的な揺れに由るものでもあった。幾度も頓挫しながら遠近、あるいは幾種もの高等教育機関への受験と入学の繰返し、物入りな音楽活動や結婚生活すらも親抱えという、裕福な家庭にありがちな「甘え」「甘やかし」が根底にあったことも事実である。反面、定職・家庭をもたぬことから来る、朔太郎への近隣の冷やかな眼、譏

り、世間体を氣遣う父母からの抑圧、そうしたもののへの反発が却って「郷土望景詩」等の詩制作のエネルギーと化された面もあるのである。

萩原朔太郎の第六詩集とされる『氷島』は、昭和九年1934六月に第一書房から刊行される。収めるところ再録詩四篇を含め二十五篇である。<sup>(3)</sup>『月に吠える』(大正六1917・2)は措くとして、『青猫』(大正十二1923・1)『蝶を夢む』(同・7)、『純情小曲集』(大正十四1925・8)、『萩原朔太郎詩集』(昭和三1928・3)の、大正末から昭和初期にかけて相次いで詩集が刊行された時期から、九年ないし六年が経過している。それでいての所載詩篇のこの数なのである。

また、如上の詩集のうち『蝶を夢む』は六〇篇のうち一六篇の再録詩篇を交え、『萩原朔太郎詩集』は既刊詩集を「全詩集」化したもので、掲載詩二〇三篇中、新作詩篇は「青猫以後」の二〇篇だけである。また、『純情小曲集』は二八篇中「愛憐詩篇」一八篇が『月に吠える』以前のものである。これらから見ても朔太郎の詩作は決して旺盛とは言いがたいのである。更に付言すれば、朔太郎はこの後も、『定本青猫』(昭和十一1936・3)、『宿命』(昭和十四1939・9)の二詩集を出す、前著は名の通り『青猫』を主にして詩篇を編み再録、収載詩篇六九篇中、新作は二篇に過ぎない。後著は抒情詩六八篇、散文詩七三篇、抒情詩はすべて既刊詩集からの再録、散文詩もまた殆どが既刊アフォリズム集から散文詩として転用されたものであり、新作は僅かに六篇でしかない。詩人としての萩原朔太郎は『氷島』で止んだと言うほかはない。

『氷島』は、いろいろと問題の多い詩集である。先ずは近代詩及び朔太郎詩の時間軸の上でいかなる展開・達成を遂げたか、あるいは区切りを果したか、—つまりは『氷島』の近代詩における史的役割の問題がある。次に「文章語」の使用の問題、すなわち『月に吠える』で口語詩の確立者の栄を担いながら、後退、退却、時代への逆行と言われ、そう見られる文語・七五調の「朗吟」をも意図した用語・韻律の問題がある。更に先述したように「郷土望景

詩」をも取り込んだの詩集成立の問題と、加えての詩篇の排列とその構成意識による詩集の詩的世界の問題がある。「芸術的意図と芸術的野心を廃棄し（略）芸術品であるよりも、著者の実生活の記録であり、切実に書かれた心の日記」と「自序」に記される詩集の形成と本質の問題である。そしてその後の詩人としての朔太郎の寡黙、沈黙に至つた理由の解明等々である。何よりも詩集『氷島』が世に問われて以来の、分裂する意義と芸術性への評価の問題がある。しかし、本稿はその全ての問題点の解明を志向するものではない。詩集の成立と構成を主に検討し、その世界を解明するのが主眼である。

二

詩集『氷島』は、詩本編を挟んで「自序」と「詩篇小解」（以下「小解」と略記）を巻頭、巻末に置く。「自序」に続く目次の次の頁に「我が心また新しく泣かんとす」と詞書した俳句「冬日暮れぬ思ひ起せや岩に牡蠣<sup>4</sup>」の一句を据える。なお奥付の二頁前に辻野久憲による「校正覚書」が付される。更に奥付に続く頁に朔太郎の著作目録が編まれる。この四六判、八十五頁の詩集の装幀について朔太郎は「明治初年の法律書から暗示を受けてイミテートした<sup>5</sup>」もの（「自著の装幀について」と言う。表紙は草色、表紙、扉とも花野の囲みのなかに、二重線で分割された上四分の一に「The Iceland」とイタリックで英語題を掲げ、その下方に詩集名「氷島」を真ん中に右肩から「西暦千九百参拾四年」「著者萩原朔太郎」、左下方に「東京第一書房版」と印刷される。この『氷島』の装幀を、富士川英郎氏は「卓れた装本の多い朔太郎の著書のなかでも、出色のもの」と言う<sup>4</sup>。朔太郎もまた気に入った装幀造本であったようである<sup>5</sup>。なお、英語題名は「The Iceland」であつて「The Icestrand」ではない。

詩本編の二五篇を目次に従つて以下に掲げ、必要な注記と、初出發表時・紙誌を提示する。便宜上、題名の上に通

1	漂泊者の歌	[序詩]	[改造]	第13巻第6号	S 6・6
2 ※	遊園地 <small>るなばあく</small> にて		[若草]	第7巻第7号	S 6・7
3	乃木坂倶楽部		[詩・現実]	第4冊	S 6・3
4 ※	殺せかし！	殺せかし！	[蠟人形]	第2巻第12号	S 6・12
5	帰郷		[詩・現実]	第4冊	S 6・3
6 *	波宜亭	(郷土望景詩)	— 郷土望景詩 —		
7	家庭		[詩・現実]	第4冊	S 6・3
8	珈琲店 酔月		[詩・現実]	第4冊	S 6・3
9	新年		[詩・現実]	第4冊	S 6・3
10	晩秋①	(朗吟のために)	[都新聞]	昭和6年1月22日	S 6・1
11	品川沖観艦式		[詩・現実]	第4冊	S 6・3
12	火		[ニヒル]	創刊号	S 5・2
13 ※	地下鉄道 <small>さぶうえい</small> にて		— 未詳 —		
14 *	小出新道	(郷土望景詩)	— 郷土望景詩 —		
15	告別		[ニヒル]	創刊号	S 5・2
16 *	中学の校庭	(郷土望景詩)	— 郷土望景詩 —		
17	動物園にて		[ニヒル]	創刊号	S 5・2

18	国定忠治の墓	〔生理〕	I	S 8・6
19	* 広瀬川	〔郷土望景詩〕	—	
20	虎	〔生理〕	I	S 8・6
21	無用の書物②	〔文藝春秋〕	第8巻第1号	S 5・1
22	虚無の鴉③	〔文藝春秋〕	第5巻第3号	S 2・3
23	我れの持たざるものは一切なり	〔文藝春秋〕	第5巻第3号	S 2・3
24	監獄裏の林	〔日本詩人〕	第6巻第3号	T 15・4
25	※ 昨日にまさる恋しさの (朗吟調小曲)	〔古東多万〕	第2年1月号	S 7・1

\*を付したものは「郷土望景詩」編からの再録詩。

※を付したものは、朔太郎の「小解」で言う「恋愛詩四篇」に当たるもの。

① 「晩秋」は初出時タイトル「断章」。「詩・現実」第4冊に他の六篇と合わせて「叙情詩七篇」の総題のもとに発表。『氷島』収録の際に「晩秋」と改められたものである。

② 「無用の書物」は、初出時、題名の後に「(虚妄の正義の序詩として)」付記される。なお、アフォリズム集『虚妄の正義』は昭和四年十月に第一書房から刊行されている。

③ 「虚無の鴉」は、初出時「否定せよ!!!」(『文藝春秋』第5巻第3号昭和二・三)、注(3)で記した『現代詩人全集』萩原朔太郎集』に収録された時に「虚無の鴉」と改題され『氷島』に及んでいる。

『氷島』の詩篇数二五は、朔太郎の詩集の中でも最少のものである。しかも、そのうち四篇「波宜亭」「小出新道」「中学の校庭」「広瀬川」は、『純情小曲集』の「郷土望景詩」からの再録である。詩篇ごとに「郷土望景詩」と

付記されている。再録ではあるが、詩集の中に散りばめられ、ひとかたまりにはなっていない。詩集の排列、構成の上で然るべき位置を占めている、占めさせられているものと考えられる。二十四番詩「監獄裏の林」も同様に「郷土望景詩」と付記されるが、他の四篇と違って『純情小曲集』からの再録ではない。前掲の初出注記に明らかかなように、もともと『純情小曲集』以後の発表である。なお「地下鉄道にて」のみ初出未詳であるが、東京の地下鉄開通は昭和二年、朔太郎は大正十四年に妻子を伴い上京しているが、それをコードとしての説明を俟つまでもなく、「小解」の「恋愛詩四篇」で他の「遊園地にて」「殺せかし！」「昨日にまさる恋しさの」と合わせて「凡て昭和五十七年の作」と断られているところである。初出の判明している三篇の制作期は昭和六年の下半期と考えて差し支えない。そこで次のことが考えられる。「地下鉄道にて」もまた他の三篇と近い時期とすべきか、三篇の制作期が限定できるにも関わらず「昭和五十七年」と幅を持たせたのは、初出未詳の「地下鉄道にて」が他の三篇の制作期と前後いずれかにはみ出るゆえとするかである。「小解」等で示される制作時期が必ずしも正確でない事例も見られるが、他の三篇の制作発表と時期的にそう大幅にずれのないものと見做しておきたい。

如上の再録詩を別にとすると、『氷島』所収詩は、「監獄裏の林」を最古とし、「動物園にて」「虎」を最新作とする、大正十五年四月から昭和八年六月までの間の発表である。その間八年のものである。「虚無の鴉」「我れの持たざるものは一切なり」は、前詩集『萩原朔太郎詩集』中の新規発表詩篇（「監獄裏の林」はその一つ）と制作期が重なる。しかしながら、『氷島』の詩篇はその発表が八年間に遍在するのではなく、昭和五年、六年に、なかんずく昭和六年に偏在集中している。昭和七年一月発表の「昨日にまさる恋しさの」もまたその制作は当然昭和六年中である。その中で言えば、「無用の書物」と、場合によれば「火」「告別」「動物園にて」は、制作はその前年のこととなる。創刊号というものは、常識的に時間の要するものだからである。書誌的には厳密を要するが、詩集『氷島』の世界、本質

を考察する場合、漠たる言い方ながら昭和五、六年作の詩篇が主流としてその世界を形成しているとしておいて大筋で間違いのないものと判じておく。

しからば、昭和五、六年制作の詩篇を主流とする『氷島』の刊行が、なぜに昭和九年六月になる時点で目論まれたのか。それは何時ごろ、いかなる動機によるものであろうか。全集収録の朔太郎書簡の範囲では手掛かりは得られない。また「自序」等からも窺い知ることとはできない。『氷島』刊行の最至近作「国定忠治の墓」「虎」からもその必然を汲み取り得ない。とすれば、「自序」で「実生活の記録」と言い、その「著者の過去の生活は、北海の極地に漂ひ流れる、侘しい氷山の生活だった」言う言辞と、年譜等から窺える生活の実態とその生活の中から汲み取れる契機と、その双方のコンパスの交叉するところから推理するしかない。その手続きは後刻のこととするが、推理の基盤さえ確固としておれば単なるあてずっぽうには終わらないものと考ええる。なお、全集年譜によれば、朔太郎が新詩集の刊行を思い立ったのは、昭和八年九月頃と記している。

### 三

『氷島』へ「郷土望景詩」から四篇の詩篇を編入したことについて、朔太郎は「自序」で次のように言う。

此処にそれを再録したのは、詩のスタイルを同一にし、且つ内容に於ても、本書の詩篇と一脈の通ずる精神があるからである。換言すればこの詩集は、或る意味に於て「郷土望景詩」の続篇であるかもしれない。

こうした朔太郎の言辞から、先行研究では『氷島』と「郷土望景詩」との連続・非連続性が論議の対象になっている。また見るべき論考もなくはない。<sup>⑦</sup>問題は両者の間の「一脈の通ずる精神」にある。その点の検証は少し後に為すとして、『氷島』が「郷土望景詩」とは別に近代詩史上に光輝する『月に吠える』『青猫』とは期を劃すものであるこ



とは朔太郎の十分に意識するところである。

近代の抒情詩、概ね皆感覺に偏重し、イマヂズムに走り、或は理智の意匠的構成に耽つて、詩的情熱の単一な原質的表現を忘れて居る。(「自序」)

全部が全部相当するとは限らぬが、これらの言辞の標的に『月に吠える』『青猫』が据えられていたとしても差し支えないものと見做せる。朔太郎は「詩的情熱の単一な原質的表現」について更に論を進めて「多彩の極致は単色」「複雑の極致は素朴」「進化した技巧の極致は、無技巧の自然的単一に帰する」と論を張り、「芸術としての詩が、すべての歴史的発展の最後に(略)究極するアイデアは、(略)ポエディの最も単純なる原質的実体」「詩的情熱の素朴純粹なる詠嘆に存する」との考えを提示する。詩の技巧と詩情とも単純化、素朴化を目指す“simple is best”の方向にある。このあたりの朔太郎の詩観と方向性は、『氷島』上梓の少し前に書かれた『詩の原理』(昭和三1928・12)や、少し後に書かれる『純正詩論』(昭和十1935・4)と合わせて考えられねばならないが、『氷島』「自序」では、如上の論の上に立つて「日本の和歌や俳句を、近代詩のアイデアする未來的形態だと／著者は考へる」とまで述べる。日本近代における詩の出版を告げた『新体詩抄』(明治十五1882)が、和歌、俳諧(川柳)を近代に堪え得ない詩形として切り捨てたことを思うと、『氷島』の詩は、詩語のみならず「後方への退陣」「自辱的な『退却』」なのか、切り捨てられた日本の伝統詩に可能性を見出して止揚を遂げたものか、その点は現在の海外での熱意ある日本伝統詩の受容と合わせて興味のあるところである。

さて、『氷島』の編纂にあたってここ何年間かの詩篇を彙集しようとして、前詩集以後の詩篇をもつて詩集の世界を全的に構成、構築し得ず、朔太郎は先行の詩集『純情小曲集』の「郷土望景詩」編から四篇を動員して加えた。なぜ「郷土望景詩」からなのか、「郷土望景詩」一〇篇のうちなぜにこの四篇なのかということが問題となってくる。<sup>(8)</sup>

また、「小解」を見る限り「恋愛詩四篇」も、「郷土望景詩」の再録四篇十一篇と同様にひと束ねにして注解されている。如上の事情から、昭和五、六年初出作を『氷島』の主流とし、他の年次の詩篇、及び「恋愛詩」「郷土望景詩」篇は『氷島』の中核と見なさないという見解もある。<sup>(9)</sup>しかし、それらはまとめて詩集中に置かれるのではなく、詩集中に散りばめられて配置されている。『氷島』では、その詩篇の排列は厳密には制作順・発表順でもなく、<sup>(10)</sup>また『月に吠える』『青猫』のように章節に分けられるのでもなく、また『純情小曲集』のように制作の時期とモチーフを異にするゆえに「愛憐詩篇」と「郷土望景詩」と二部立てにされたのとは違い、制作の時期とモチーフを異にする詩篇が渾然として同じ地平に並べられているのである。排列の中にどういう秩序があるのか容易には見究めがたい。

先行研究の中で構成論から『氷島』の世界に入り、そこに秩序を見出しているのが安藤靖彦氏である。<sup>(11)</sup>それは自身も述べるように、この種の角度から『氷島』を論じる唯一と<sup>(12)</sup>いっていいものである。安藤氏は、「創作年次や発表年次とは別の、彼には美的と言える統一意識のもと」「朔太郎が一定のモチーフにおいて詩篇を並べている」という見解のもと、『氷島』二五詩篇の構成を分析している。

安藤氏は、『氷島』は「二つに分け得る」とする。その境は十三番詩「地下鉄道にて」と十四番詩「小出新道」にある。その際二つの部分の巻軸の位置を占めるのは「地下鉄道にて」と「昨日にまさる恋しさの」の二篇になる。両者に共通するのはともに「恋愛詩」であり、朗吟調の詩であるとする。その上に立ち安藤氏は「美的統一意識の局は、失恋詩で結ばれている」と言う。この指摘はある意味で重要なものである。

安藤氏は、前・後半部（氏は「第一部」「第二部」とも表示する）の各詩篇の主だったものを排列順に検討し、詩の内容を確認するとともに、それぞれの位置での担う役割を考察する。しかし長きに亙るので、ここでは前後半部の構成についての安藤氏による分析と見解だけを確認して置く。前半部は「晩秋」までの一〇篇と以下の三篇に分け得る。

「晩秋」は、「失望の人生」を歌って冒頭の「漂泊者の歌」と呼応し、終わり三詩篇は「詩集の流れの、屈折的媒介部」であるとする。後半部は「無用の書物」までの八篇とそれ以後の四篇に分けて考えている。前半部が「漂泊者の歌」の都市詩篇から始まったのに対して、後半部が「小出新道」の望郷詩篇で始まるのは対照的で、その前半は「望郷詩篇と都市詩篇との、喪失感を軸とする巧妙な交響を聴き」、後半部は「自己半生の総括」が見られるとする。安藤氏は、「昨日にまさる恋しさの」が巻末に置かれたこと、そしてそれが「恋愛詩」「朗吟調」と二重に背負った性格から、「恋のモチーフの締めくくりであり、朗吟調小曲として（略）律のモチーフの締めくくりの役をも果たしている」とする。かような各詩篇の「構成論」的考察の上に立って、安藤氏は詩集『氷島』の性格を左記のように示す。

故郷からの出離と回帰、少年の日の出発とその日々への追憶的回帰という主題が繰り返される。そこへ、恋のモチーフが、律のモチーフに絡まりながら伴奏され、やがてそれが主調音となって響く（略）その不幸な履歴をリズムに紡いだ（略）紡いで織ったのである。

諸々の『氷島』論・研究のうち、「構成」論からそのモチーフ（主題）、世界分析に到った唯一と言っていい論考であり、評価できるものである。ただ、重視はされているものの「漂泊者の歌」を「第一部」の巻頭詩篇として扱って、朔太郎が『氷島』の「序詩」（「巻頭に掲げて序詩となす」（「小解」）としたことへの十分な顧慮が払われていないことはいかなるものか。また、私は賛意を表したいが、多くの評家が『氷島』の必ずしも主調と見做していない「恋愛詩」をライトモチーフとすることへの説得力の問題である。

#### 四

本論稿もまた、『氷島』の「構成」への関心から入りたい。再三触れたように『氷島』は、編集時（昭和八年後半）

九年初頭)より数年遡った昭和五、六年作を中心に、最近時では昭和八年六月の発表作を、旧くは大正十五年作(年  
末ぎりぎりの時点での昭和改元の年でもある)、更に遡って『純情小曲集』『郷土望景詩』からの四篇をも加えて一集と成  
している。一集を成すに必要としたから再録をしたものと判じる。また、一見、『氷島』の主調あるいは基調から外  
れそうな印象を受けるような題名を有する「品川沖觀艦式」「国定忠治の墓」の二篇すらも、『氷島』の詩情に違和感  
なく溶け込むものをもっていさえする。そうして、これも先に触れたが、詩集期間作の詩篇に「郷土望景詩」群と  
「恋愛詩篇」群が編入され、しかもそれらが分散して排列され、配置されている。いかような方針のもとに排列され  
ているのか、それを汲み取るのは容易ではない。

いま一度、「自序」に心を傾けてみる必要がある。

著者の過去の生活は、北海の極地を漂ひ流れる、侘しい氷山の生活だった。その氷山の鳴々から、幻像まぼろしのやうな  
オーロラを見て、著者はあこがれ、悩み、悦び、悲しみ、且つ自ら怒りつつ、空しく潮流のままに漂泊して来  
た。著者は「永遠の漂泊者」であり、何所に宿るべき家郷も持たない。著者の心の上には、常に極地の侘しい曇  
天があり、魂を切り裂く氷島の風が鳴り叫んで居る。さうした痛ましい人生と、その実生活の日記とを、著者は  
すべて此等の詩篇に書いたのである。

極めて喩的な言辞であるが、幾つかの問題と他との関連を指摘して置きたい。まず、「著者の過去の生活は」と、  
『氷島』に歌われた「生活」を過去のこととして清算的な響きがあることである。この点については後に触れる。

次に「小解」で「恋愛詩四篇」を指して以下のように書く。

今は既に破き棄てたる、日記の果敢なきエピソードなり。我れの如き極地の人、氷島の上に独り住み居て、そも  
そも何の愛恋ぞや。過去は恥多く悔多し。これもまた北極の長夜に見たる、侘しき極光おしるらの幻燈なるべし。

「日記」については、「自序」のこの直前の「著者の実生活の記録であり、切実に書かれた心の日記」ということを合わせて見てみる必要がある。「再録」詩篇を除く『氷島』詩篇の発表期間——ひいては詩作期間には、朔太郎の人生はさまざまに深刻な体験をしている。朔太郎は大正十四年の妻子を伴つての上京、昭和二年の芥川龍之介の自殺、昭和四年の妻稻子の出奔による離婚、二児を引き連れての帰郷、昭和五年の父・密蔵の死、生田春月の投身等々で、この間は前橋、東京間を往復すること頻りである。妻子持ち、单身いずれの時も、転居を繰り返している。また、昭和八年には父死後の家長として東京代田に家を築き、母、妹、二人の子とともに同居を果している。『氷島』では「実生活の記録」と言いながら父親の死は詩には書き留められない。<sup>(13)</sup>春月の死についても同様である。「心の日記」という所以である。

また「氷島」から望み見る「幻像のオーロラ」は、「小解」では「侘しき極光の幻燈」となる。「自序」等を見る限り、『氷島』の漂流・漂泊の意識は「侘しさ」一色であるが、「極光」に対しては「あこがれ、悩み、悦び、悲しみ、且つ自ら怒りつつ、空しく」と感情は一樣ではない。問題は「氷山（氷島）」にある漂流・漂泊意識と、そこから望み見る恋愛詩の「極光」、そういう構図のもとに見る時、「序詩」としての巻頭詩「漂泊者の歌」と、恋愛詩の一つで巻軸詩の「昨日にまさる恋しさの」の配置は、対置と呼応が果されたものと見做せる。『氷島』詩篇の排列の主軸を成している。その軸線に立つて『氷島』の詩の排列、構成は考えられなくてはならない。

詩集『氷島』を構成し、世界を構築するにあたって、朔太郎はいちばんの旧作である「監獄裏の林」に加えて既刊詩集『純情小曲集』から「郷土望景詩」四篇を「再録」し加えている。「自序」で朔太郎が『氷島』と『純情小曲集』「郷土望景詩」との間に「一脈の通ずる精神がある」「続篇であるかも知れない」ということから、『氷島』評価をめぐって、すでに触れたようにその連続・非連続の論議がある。しかし問題は『氷島』である。朔太郎はつまみ食いの

に「郷土望景詩」を摘出、『氷島』の構成、世界の構築のために加えた。奉仕せしめたのである。

「監獄裏の林」を含む「郷土望景詩」五篇は、詩集二五篇中、第六、第十四、第十六、第十九、第二十四番目に位置する。『氷島』巻末の「小解」では「監獄裏の林」は独自に取り上げられ、その所在、建物の配置、環境、囚人の就労ぶり等の解説に交え、監獄署の背後にある檜林、麦畠を「我れ少年の日は、常に麦笛を鳴らして此所を過ぎ、長き煉瓦の塀を廻りて、果なき憂愁にさびしみしが」と、詩の情景に添った解説を施しているかに見える。回想は「少年の日（の）孤独と憂愁」へ向かっているのである。また、再録詩四篇についても「我れ少年の日より、常にその河辺を逍遙し、その街路を行き、その小旗亭の庭に遊べり。」と、その郷土への望景、回想はここでも「少年の日」に及んでいる、あるいは及ぼしている。『純情小曲集』の巻末にはやはり「郷土望景詩の後に」なる文章が添えられている。これは『氷島』の「詩篇小解」に相当するもので、必ずしも詩篇単位の説明ではなく詩篇の地誌的な解説の役割を専ら果すものだが、その機能も筆致や文体も「小解」と同趣のものである。「小出松林」では「我れ少年の時より、学校を厭ひて林を好み、常に瞑想に耽りたる所」が、新道開通のために樹木が切り払われ、その新道の「利根川の岸に通ずる如きも、我れその遠き行方を知らず」と結ばれる。また「波宜亭」は「先年まで前橋公園前にありき。(略) 今はいづこへ行きしか、跡方さへなし」、「前橋中学」では校庭の様変わりを述べた後、「われの如き怠惰の生徒ら、今も猶そこにありやなしや」と問う。いずれも少年の日の記憶に繋がる前橋一帯の自然環境の荒廃を嘆息するものである。「広瀬川」についての記述はないが、「小解」では「蒼茫として歲月過ぎ、広瀬川今も白く流れたれども、わが生の無為を救ふべからず」と詩句を引きながら述べ、不朽の自然もまた己の無為を覆えないことを告白する。

朔太郎は、「芸苑」第二号（昭和十二年十二月）に散文詩「物みなは歳日と共に亡び行く―わが故郷に帰れる日、ひそかに秘めて歌へる歌―」を発表（「四季」昭和十三年二月号に再発表）する。後に『宿命』の巻軸詩として収められる

この詩篇は、広瀬川河畔逍遙の「物みなは歳日と共に亡び行く。／ひとり来てさまよへば／流れも速き広瀬川。／何にせかれて止むべき／憂ひのみ永く残りて／わが情熱の日も暮れ行けり。」の新しく草した詩篇に始まり、「先日」久しぶりで故郷へ帰り、(略)物みなは歳日と共に亡び行く―郷土望景詩に歌つたすべての古蹟が、殆んど皆跡方もなく廃滅して、再度また若かつた日の記憶を、郷土に見ることができないので、心寂寞の情にさしぐんだのである。」(引用は『宿命』による。「」内は初出時。『宿命』では削除)との思いを歌う。この久しぶりの帰省は、昭和十二年二月の、墓参を兼ねかつ保田与重郎、神保光太郎らを誘った折のことと考えられる。その際、萩原恭次郎らの案内で故旧の地を經廻っている。『氷島』刊行以来三年弱の歳月を經ているわけだが、新詩に交え「郷土望景詩」、就中『氷島』再録の詩篇を誦しつつ「寂寞の情」を新たにしたのである。先に注記したようにこの時初めて「父の墓に詣でで」を草し、「わが草木とならん日に／たれかは知らむ敗亡の／歴史を墓に刻むべき。」と、自らの生を「敗亡の歴史」と意識している。上記したように時は隔たっているが、その損耗の思いは『氷島』詩篇のある種のもの、「郷土望景詩」を含めたすべての詩に繋がるのではないか。なお付記すれば、散文詩題「物みなは歳日と共に亡び行く」は、「郷土望景詩」篇「広瀬川」の第二行目の詩句「時さればみな幻想は消えゆかん」に呼応することは言を俟たない。

如上の考察に基づけば、『氷島』における詩篇の排列における「郷土望景詩」の分散しての配置は、『氷島』詩情の基底にある人生の「寂寥」「孤独」「敗亡」の意識が若年の、在郷する日にすでに胚胎していたこと、そうした思いを確認しようとするれば「少年の日」が起点にして帰点であることを示すものである。従って、『氷島』の構成は「郷土望景詩」の配置を重視して考慮されるべきである。

## 五

『氷島』詩篇の排列の意図ないしルールについては、ある意味では単純化して考えられなくもない。先掲『氷島』詩篇一覧を見ると、再録詩篇を除くと、一番詩「漂泊者の歌」以下「遊園地にて」「乃木坂倶楽部」「殺せかし！」「動物園にて」は昭和五年発表詩、続く「国定忠治の墓」「虎」は昭和八年発表である。次の「無用の書物」は昭和五年発表詩、続けて「虚無の鴉」「我れの持たざるものは一切なり」は昭和二年発表詩、「監獄裏の林」はその前年の大正十五年の発表、最後の「昨日にまさる恋しさの」は唯一の昭和七年発表詩である。こうしてみると昭和六年発表詩一〇篇—五年発表詩三篇—八年発表詩二篇—五年発表詩一篇—二年発表詩二篇、大正十五年発表詩一篇—昭和七年詩一篇の順となる。昭和六年発表詩を主軸とし、その前後の年の発表詩を交互に置いた排列になる。しかし、そうした排列の向こうにいかなる構成が見られるか。また昭和六年三月の「詩・現実」に同時に発表された「乃木坂倶楽部」「帰郷」「家庭」「珈琲店 酔月」「新年」「品川沖観艦式」「晩秋」の七篇が詩集前半部に集中して置かれているが、モチーフに類縁性の濃い詩篇が、必ずしも連続して置かれているわけではないこと。そうした詩篇の間に割って入るようにして措かれる所謂「郷土望景詩」篇の担う意義等を考えると、如上の排列のルールは、必ずしも構成論へ止揚できないのである。また『氷島』の詩篇の発表年を基に排列を見たが、制作年次に関して言えば、制作が発表に近い段階としても都新聞発表（昭和六年一月二十二日）の「晩秋」（初出時題名「断章」）は別にして、一月号雑誌発表のものも完全にその前年以前の作であり、二月号のものも前年以前作である可能性がある。一部の詩篇を除いて作品の制作時は不明であるが、制作時に合わせて詩集の構成を点検したとすればまた違った位相となることも十分に考えられる。



る。この点に関しては後により詳しく検討する。

如上の詩集『氷島』の成立、排列の検討を踏まえた上での『氷島』構成に関する私見（試見）を示せば、次のようになる。

・序詩——「漂泊者の歌」（一番詩）

・第一部——「遊園地にて」「乃木坂倶楽部」「殺せかし！ 殺せかし！」「帰郷」「波宜亭」（二番詩〜六番詩）

・第二部——「家庭」「珈琲店 酔月」「新年」「晚秋」「品川沖観艦式」「火」「地下鉄道にて」「小出新道」（七番詩〜十四番詩）

・第三部——「告别」「中学の校庭」（十五番詩・十六番詩）

・第四部——「動物園にて」「国定忠治の墓」「広瀬川」（十七番詩〜十九番詩）

・第五部——「虎」「無用の書物」「虚無の鴉」「我れの持たざるものは一切なり」「監獄裏の林」（二十番詩〜二十四番詩）

・終詩——「昨日にまさる恋しさの」（二十五番詩）

細分に過ぎる感があるかも知れないが、以上の構成上の区分は、序詩、終詩を別にして、「郷土望景詩」篇の位置を重視し、各部の終わりに「郷土望景詩」篇を置いて為したものである。「漂泊者の歌」は詩人自らが「小解」で「序詩」として位置づけるところであり、後に検証するように「序詩」としての役割を十分に担っている。「昨日にまさる恋しさの」は、制作時の近い他の詩、類縁性の濃い他の詩と切り離されて巻軸に置かれたことからして「終詩」とみてよいものと思われる。

右を更に第一部、第二部を合わせて前半部とし、第三部に第四、第五部を合わせて後半部とすることができ。

・序詩。

・前半部—二番詩「遊園地にて」から十四番詩「小出新道」まで。

・後半部—十五番詩「告別」から二十四番詩「監獄裏の林」まで。

・終詩。

また、前後半部の区分は、郷土望景詩の位置と合わせて、「告別」詩篇を重視するがゆえである。追って、論証する予定である。構成に沿って『氷島』の世界を見極めて行きたい。

## 六

『氷島』の「序詩」とされる「漂泊者の歌」は、昭和六年六月の発表である。制作時は不明だが、推理はできる。

それは「詩・現実」三月号に「叙情詩七篇」を発表し、その文芸的昂揚を受けてのものではないかと考えられる。そしてその翌月から「恋愛詩」（初出未詳の「地下鉄道にて」を除く）を翌年にかけて発表し始める。「叙情詩七篇」に横溢する詩情は、妻出奔による家庭の崩壊、荒廃とそれに繋がる自責と呵責の思い、そして憂愁、憂情である。

日は断崖の上に登り

ああ汝 漂泊者！

憂ひは陸橋の下を低く歩めり。

過去より来りて未来を過ぎ

無限に遠き空の彼方

久遠の郷愁を追ひ行くもの。

続ける鉄路の柵の背後に

いかなれば蹠爾さうじとして

一つの寂しき影は漂ふ。

時計の如くに憂ひ歩むぞ。

一つの輪廻を断絶して

意志なき寂寥を踏み切れかし。

ああ 悪魔よりも孤独にして

汝は氷霜の冬に耐えたるかな！

かつて何物をも信ずることなく

汝の信ずるところに憤怒を知れり。

かつて欲情の否定を知らず

汝の欲情するものを弾劾せり。

いかなればまた愁ひ疲れて

やさしく抱かれ接吻する者の家に帰らん。

かつて何物をも汝は愛せず

何物もまたかつて汝を愛せざるべし。

ああ汝 寂寥の人

悲しき落日の坂を登りて

意志なき断崖を漂泊さまよひ行けど

いづこに家郷はあらざるべし。

汝の家郷はあらざるべし。

※ 詩篇の引用に際しては原詩のルビは誤読を恐れる場合、二様以上の読みが可能な場合を除いて極力省略している。以下、同じ。

「小解」の「断崖に沿ふて、陸橋の下を歩み行く人、それは我が永遠の姿、寂しき漂泊者の影なり」は、作者ならではの至妙の影像的な自己認識である。第一連の低徊し徘徊する孤独の寂寥者の姿を印象づけるのは「憂ひはく低く歩めり」、漂う「二つの寂しき影」に形象し尽くされている。第三連の三・四行、五・六、九・十行の三組の対句的な表現は、他者との信と愛における不通、己の中の欲情の放恣による心の負傷を歌って人生の不遇、不幸を歌う。制作時「叙情詩七篇」を通して実感された心の記録である。また、第二連の「過去より来りて未来を過ぎ／久遠の郷愁を追ひ行く」はずの漂泊者の像、「意志なき寂寥を踏み切れかし」、第三連の「愁ひ疲れて／やさしく抱かれ接吻する者の家に帰らん」願望が、第四連で「いづこに」も「汝」にも「家郷はあらざるべし」と、あるいは「漂泊者」を「寂

寥者」と置き変えられることで打ち消されていることである。

本詩は『氷島』の巻頭に置かれ、朔太郎によつて「序詩」と位置づけられていることで、単独で論じられたり鑑賞されること『氷島』詩篇中最多である。論及は多いが、その中でおおむね見落とされていることは、第二連の「ああ汝漂泊者！」が第四連で「ああ汝寂寥の人」と置き換えられていることである。これは置換であるとともに、「漂泊者」にして「寂寥の人」と意味の層が重ねられているとも理解できるが、「寂寥の人」であることに比重がある。『氷島』前半は「漂泊者」であることで、そして「家郷」を断たれた漂泊者の絶対的な「寂寥」が『氷島』の後半部と呼応して、「漂泊者の歌」の「序詩」たる所以があるのである。それはまた、この詩の昭和六年発表におよそ三年近い時差を置いて書かれた『氷島』「自序」の「著者の過去の生活は、北海の極地を漂ひ流れる、侘しい氷山の生活」と殊更に「過去」という措辞を加えた自己の生の展望である。「漂泊者の歌」を「序詩」とする『氷島』の詩的世界は「寂寥の人」の発する魂の実録と見做せる。

「漂泊者の歌」にも明らかかなように『氷島』の詩の文体・文調は「慷慨」調である。『氷島』を評するに「慷慨」調をもつてすることは一般化され、特定者のオリジナルな見解となっていないほどである。加えて『氷島』詩篇の措辞の上で頻出するのは、助辞の「かし、べし、かな、ぞ」と、詠嘆に繋がる完了・過去の助動詞「たり、けり、り」で、これらも「慷慨」調の生成に貢献するところ大である。更にこうした終末辞もさることながら、「漂泊者の歌」にも二度用いられる「いかなれば」と「いかなぞ」（「いかにぞ」の音便）の副詞的用辞である。『氷島』全詩篇中「いかなれば」の措辞をもつもの六篇、「いかなぞ」の措辞をもつもの九篇、そのうちその双方が用いられるもの一篇である。全二五篇中の過半である。また同義の措辞として「遊園地にて」の「なになれば」、「告别」の「いかなる」を加えればいっそうそのその比重は増す。「漂泊者の歌」に限れば「いかなれば」が二度用いられ、「いかなれば」憂ひ歩む

ぞ」「いかなればく愁ひ疲れてく帰らん」と自己の現状に懷疑を発し、それらを否定し去ることで無一物、無所在、無伴侶の寂寥の人生を吟じ出すのである。また人生の余儀なさ、招かざる不条理な結果への思いの深さである。

## 七

『氷島』の第一部は、第二番詩から第六番詩までである。

第二番詩「遊園地にて」は、朔太郎の言う「恋愛詩四篇」のうちの一篇である。昭和四年、朔太郎は妻稲子と離婚するが、昭和十三年、五十三歳で「二十七歳になる娘で、まるで自分の子供のやうな」(日夏耿之介宛書簡)大谷美津子と再婚するまで、離婚早々と言つていい時期から、再三縁談を求め、見合いもし、交際を始めもしている。この点は書簡や証言で確かめ得る。また離婚前にも妻以外の女性との付き合いもあつたとされる。したがって『氷島』の「恋愛詩篇」は、先の朔太郎の注解よりも時期が遡るといふ見解もある<sup>(14)</sup>。しかし、それら「恋愛詩篇」は一まとめにされず、解体して詩集中に散在させられているので、必ずしも具体的な恋人像、特定の女性像を形造らないし、また二人の關係図を明確にするものではない。『氷島』詩篇の時空では、妻との、また妻と子との離間の詩と合わせて排列されているので(この二つの系列の詩篇は先に触れたごとく発表時期は微妙にずれている)、異性の像は実体・実態を離れて『氷島』的世界の中で寂寥を生む、家郷への期待を希薄なものとし、否定するものとして位置づけられるのである。

遊園地にて

るなばあく  
遊園地の午後なりき

楽隊は空に轟き

廻転木馬の目まぐるしく

艶めく紅のごむ風船

群集の上を飛び行けり

んとす

今日の日曜を此所に来りて

暮春に迫る落日の前

われら模擬飛行機の座席に乗れど

われら既にこれを見たり

側へに思惟するものは寂しきなり。

いかんぞ人生を展開せざらむ。

なになれば君が瞳孔ひとみに

飛べよかし！ 飛べよかし！

やさしき憂愁をたたえ給ふか。

座席に肩を寄りそひて

明るき四月の外光の中

接吻きすするみ手を借かしたまへや。

嬉々たる群集の中に座りて

ふたり模擬飛行機の座席に乗れど

見よこの飛翔する空の向うに

君の円舞曲わらわは遠くして

一つの地平は高く揚り また傾き 低く沈み行か

側へに思惟するものは寂しきなり。

秀抜な詩である。日曜の午後の遊園地を活写する第一連。その遊園地に来て模擬飛行機に座乗して逢う二人。片方かたえに居てももの思いに耽る者の寂しき。ここでは「いかなれば」に替わって「なになれば」を用い、相手の「憂愁」を慮る。「やさし」には、〈身も世もあらぬくらい辛い〉から〈つつましい〉まで幅広い語感がある。第三連の「見よこの飛翔する空の向こうに／一つの地平は高く揚りまた傾き低く沈み行かんとす」るは、回転する模擬飛行機からの天地の波動する情景。恰も人生の顛末を見るごとき光景なるがゆえに「暮春に迫る落日の前／われら既にこれを見たり／いかんぞ人生を展開せざらむ」と問われる。「今日の果敢なき憂愁を捨て／飛べよかし！」と念じても、模擬の飛行機では現実を脱却できない。「側へに思惟するものは寂しきなり」の詩句の二度の反復に、その閉塞した情況を示し

ている。「漂泊者の歌」とは十一か月の差での発表、「接吻する」の詩句の前詩との接続はそのゆえだが、詩集の空間でも並べられたゆえんでもある。

第三番詩「乃木坂倶楽部」は、昭和四年の「我れ非情の妻と別れてより、二児を家郷の母に托し、暫くこのアパートメントに寓す。連日荒妄し、懶惰最も極めたり」（「小解」）と記す時期を背景とする。しかもこの寓居は、同年暮れの父の危篤による帰省で一か月そこそこで引き上げられている。

「十二月また来れり。／なんぞこの冬の寒きや。／去年はアパートの五階に住み……」と一年前の冬を回想する形で詩は起草される。時間的には発表は前二詩に先立つが、「人生の虚妄に疲れて」、「広漠たる洋室」に「家畜の如くに飢ゑ」「熊の如くに眠れる」懶惰、無為の日々を詠ずる。ここでの「いかなれば」は、「追はるる如く／歳暮の忙しき街を憂ひ迷ひて／昼もなほ酒場の椅子に酔はんとするぞ」と、「憂ひ」を酒に紛らわさんとする自己に向けられている。この詩には「いかんぞ」は表われないが（同義語の「なんぞ」が二度用いられている）、初出時には第一連の後に「いかんぞ貧しき錢に換へて／酔えたる情熱を求むるあらん。／汝の意識を断絶せよ」の三行があり、詩集収録時に削除されている。二連からなるこの詩のそれぞれの連の冒頭に「十二月また来れり。／なんぞこの冬の寒きや」の二行が置かれる。貧寒とした季節―人生の季節への詠唱は、そのまま人生の「氷山」の喩的な形象である。「荒漠とした洋室の中」の懶惰と無為の日々が詠じられる。「我れは何物も喪失せず／また一切を失ひ尽くせり」は、二十二番詩「虚無の鴉」の詩句「我れの持たざるものは一切なり」、二十三番詩「我れの持たざるものは一切なり」に繋がる。この詩の虚脱感、絶望感が、虚無の寂寥へと深まる構図である。

第四番詩「殺せかし！ 殺せかし！」は、「いかなれば」を起句とし、詠い起こされる。「恋愛詩」の一つだが、「いかなればかくも気高く／優しく麗はしく、<sup>かぐ</sup>香はしく／すべてを越えて君のみが匂ひたまふぞ」と、今度は相手の

類くない美麗さと高貴さを称え、自らは「醜き獣」「奴隸なり家畜なり」と、女性の美の前に拝跪し、「息の根の止まるときまで」蹈みつけ、侮辱し、唾棄され、足蹴にされ、呵責されることを願う。マゾヒスティックな喜悅の窺える詩だが、詩は一步進めてそうした「悲しき忍従に耐えんより」は、鞭もて「殺せかし！」と願うに至る。嗜虐的な悦びを極致とする恋愛詩は、事態の破局と関係の破綻と同義である。小松郁子氏に、この詩のマゾ的な詩境に、谷崎潤一郎の「痴人の愛」との関わりがあり、更に「殺せかし！」の詩句に、第二番詩「遊園地にて」の「飛べよかし！ 飛べよかし！」からエコーするもののあるとの指摘がある<sup>16</sup>。

第五番詩「帰郷」は、「昭和四年の冬、妻と離別し二児を抱へて故郷に帰る」の詞書を有する。妻の離反、遺された二人の幼児を伴つての帰郷は、同じ年の七月、夏のことである。これは実生活上に紛れもなく生じた事態である。それを詩の前書きでは同じ昭和四年だが、実際の時期とは異なる、夏から冬に変えられている。初出時の同時発表作「叙事詩七篇」では、季節を移行することで表したい文芸上の真実があつたはずである。初出時に生活的事実の「改竄」は既に行われていたが、そのことは今は問わない。詩集『氷島』では、「乃木坂倶楽部」の次に置かれて季節的な辻褄は、期せずしてか、期してか撞着せずに済んだわけである。

全一連二十一行のこの詩は、三つの部分に分けられる。

わが故郷に帰れる日

まだ上州の山は見えずや。

汽車は烈風の中を突き行けり。

夜汽車の仄暗き車燈の影に

ひとり車窓に目醒むれば

母なき子供等は眠り泣き

汽笛は平野を明るくせり。

ひそかに皆わが憂愁を探れるなり。

凜冽とした冬の自然の中を驀進する夜汽車、その中の「仄暗き車燈の影に／眠り泣く（泣き眠る）でもあろう」



／母なき子供等」が「憂愁にとらわれる」自分を偷み見るがに探る。子供は子供で不安なのである。「まだく見えぬや」と待ち望む上州の山野は、

嗚呼また都を逃れ来て

砂礫のごとき人生かな！

何所の家郷に行かむとするぞ。

われ既に勇氣おとろへ

過去は寂寥の谷に繋がり

暗澹として長へに生きるに倦みたり。

未来は絶望の岸に向へり。

せつかく「都を逃れ来て」も「家郷」たり得ないのである。「過去より来りて未来を過ぎ」行く「久遠の郷愁」などなく、「寂寥の谷」の深まり、遮る「絶望の岸」しかない。過去も未来も閉ざされているのである。「砂礫の如」き潤いのない人生、生きるに勇氣なく、氣力も衰えている。救いのない暗澹とした人の生よしかなことが詠われる。

いかなぞ故郷に独り帰り

自然の荒寥たる意志の彼岸に

さびしくまた利根川の岸に立たんや。

人の憤慨いきどほりを烈しくせり。

汽車は曠野を走り行き

「帰郷」の最終部分、おそらく「自然の荒寥たる意志の彼岸に／汽車は曠野を走り行き／人の憤怒を烈しくせり」であろう。詩人は「利根川の岸」に立つて望見すると想定したイメージである。「憤怒」は何処へも向けようのない、したがって己に向けるしかないものである。それがいつそう憤怒を掻き立てる構図である。そしてこの詩の眼目を一連の流れのなかで読み取れば、キーは「いかなぞ」にある。「いかなぞ故郷に独り帰り／さびしくまた利根川の岸に立たんや」にある。あの「寂寥」に、望まずして再び佇たねばならないというにある。<sup>(17)</sup>

こうして第一部の最後に、再録詩「波宜亭」が置かれる。

少年の日は物に感ぜしや

われ波宜亭の二階によりて

かなしき情欲の思ひにしづめり。

その亭の庭にも草木茂み

風ふき渡りてぼうぼうたけれども

かのふるき待たれびとありやなしや。

いにしへの日には鉛筆もて

欄干にさへ記せし名なり。

『純情小曲集』に付された「郷土望景詩の後に」の「波宜亭」によれば、「波宜亭、萩亭ともいふ。先年まで前橋公園前にありき。庭に秋草茂り、軒傾きて古雅に床しき旗亭なりしが、今はいづこに行きしか、跡方さへもなし」と記述される。「郷土望景詩」の時点ではすでに廃墟になっている。「物みなは歳日と共に亡び行く」の時点では公園の一部に化している。かつてそこに佇んで「少年の日」のあえかな恋へ思いを馳せていく。示し合わせ、忍び会った「待たれびと」の名を欄干に記した記憶。少年らしい「情欲の思ひ」の鬱屈にとらわれながらも、情趣化された初恋の記憶は清新である。いまその詩を再録することで、その日に還って行く。清新な思いを甦らせる。同じ詩であつても『純情小曲集』『郷土望景詩』中であつた時と、新たに『氷島』の六番詩として配置された場合は、よしんば詩のモチーフに変わりはなくとも、他の詩との連関の中での機能は相違して差し支えないだろう。安藤氏の言う如く「この作品は「郷土望景詩」から拾われて、一つの物語のうちに甦<sup>(18)</sup>っている」と言えるのであろうか。前詩の「憤怒」はここに浄化を得たのであろうか。

第一部五篇の詩の中で「憂愁」「憂(愁)ひ」の措辞のないのは、唯一この再録詩「波宜亭」のみである。以後の『氷島』詩篇では「火」にのみ一度「憂愁」の語は見られるのみである(ただし「珈琲店 酔月」に「暗愁」の語が見られる)。人生、破局へ破局へ向かう構図の中、暗澹に閉ざされ消沈する生に逆らえない俤に「憂愁」に塞がれる思いが、第一部の基調になっているのである。論証を省くが『月に吠える』、殊に『青猫』の「憂鬱」は人生へのパツ

シヨンの変形である。沈湎する『氷島』の「憂愁」は落魄、寂寥へ繋がる心懐である。

## 八

第二部は『氷島』第七番詩から第十四番詩までである。先掲の八篇になる。私案での詩集を構成する各部中、詩篇数は最も多い。第一部と合わせて『氷島』の前半部とする。第二部の詩情を先取りして言えば「悔恨」と「空無」「飢え」「渴き」である。

第七番詩「家庭」は、妻との確執を歌う。

古き家の中に坐りて

互に黙しもたつつ語り合へり。

仇敵に非ず

債鬼に非ず

「見よ！ われは汝の妻

死ぬるとも尚離れざるべし

眼は意地悪しく 復讐に燃え 憎々しげに刺し貫

ぬく

古き家の中に坐りて

脱るべき術もあらじかし。

「仇敵に非ず／債鬼に非」ざる妻が「見よ！ われは汝の妻／死ぬるとも尚離れざるべし」／眼は意地悪しく復讐に燃え憎々しげに刺し貫ぬく。」とある。仇敵よりも、債鬼よりも、妻であるがゆえに具合の悪い存在、意地の張り合いの抜き差しならぬ情況が「古き家に坐りて」対峙し合う。「古き家」は崩壊直前の家庭の謂である。「古き家」について、安藤は「制度としての家、そして父祖伝来の家のイメージ」と言う。<sup>19</sup>前橋の実家での生活は居心地は悪くても、夫婦の対立はなかった。妻にダンスを習わせ妻をモダンに変えようとして変わりすぎた妻、小説では必要とする事実は詩では水面下にある。詩に詠じられた場面は局面だけを形象する。破局を前にした絶体絶命の境にある。最終

行「脱るべき術もあらじかし」に、どうしようもない絶望が詠じられる。

第八番詩「珈琲店 酔月」は、場末の侘しきをもつ珈琲店、と言つても「貧しき酒瓶の列」の詩句があり、酒房でもあることが示される。卑しげな女たちがはげ鷹のように無理やりに財布を奪う狼藉の店でもある。そして、前詩を受けるがに

ああ この暗愁も久しいかな！

我れまさに年老いて家郷なく

妻子離散して孤独なり

いかんぞまた漂泊の悔を知らむ。

(「珈琲店 酔月」部分)

「暗愁も久しい」逼迫した境涯の中、「いかんぞまた知」る「漂泊の悔」とは何か。「小解」に「酔月の如き珈琲店は、行くところの侘しき場末に実在すべし。我れの如き悲しき痴漢、老いて人生の家郷を知らず、酔うて巷路に徘徊するもの、何所にまた有りや無しや、坂を登らむと欲して、我が心は常に渴きに耐えざるなり」と注解する。「漂泊の悔」は「渴き」に実感される。「悔い」は繰返され、詩集の上では次詩に繋がる。

次詩九番詩「新年」は、『氷島』を評価しなかった三好達治が、最も否定的に対処した詩篇である。表現の生硬、佶屈の見られる詩である。「新年来り／門松は白く光れり。道路みな霜に凍りて／冬の稟烈たる寒気の中／地球はその週曆を新たにするか。」と新年の到来とその新たな気分を歌う。しかし、詠われる骨子はさほど難しくもなく理解し得る。詩は以下のように続く。

われは尚悔いて恨みず

いかなれば虚無の時空に

百度もまた昨日の弾効を新たにせむ。

新しき弁証の非有を知らんや。

わが感情は飢ゑて叫び

見よ！ 人生は過失なり。

わが生活は荒寥たる山野に住めり。

今日の思惟するものは断絶して

いかなぞ曆数の回帰を知らむ

百度もなほ昨日の悔恨を新たにせん。

ここでも「飢ゑ」て「荒寥たる山野に住」むなか「漂泊の悔」いが詠われる。「思惟」を断ち、現状を打開し揚棄する弁証を持たず、「悔いても（他を）恨みず」、「悔恨」の抹消を図るのでなく、「百度（自らを）弾効」し悔恨を新たにしようというにある。まさに「小解」にあるごとく「年々歳々、我れは昨日の悔恨を繰返して、しかも自ら悔恨せず、よし人生過失なるも、我が欲情するものは過失に非ず。いかなぞ一切を弾効するも、昨日の悔恨を悔恨せん」云々である。「悔恨」に生きんとする朔太郎にとって、「人生は過失」の痛恨を必要とする。

十番詩「晩秋」と十一番詩「品川沖観艦式」は、「静かに心を顧みて／満たさるなきに驚けり」（「晩秋」）、艦船のパレードの後の沖に錨する「艦等ふねみな帰港の情に渴ける」（「品川沖観艦式」）と心の飢え、渴きを詠う。「晩秋」の「巷に秋の夕日散り／舗道に車馬は行き交へども／わが人生は有りや無しや」と絶望的な嘆かきを吐く。

十二番詩「火」は、「赤く燃える火を見たり／獣類けものの如く／汝は沈黙して言はざるかな」との第一連に始まる。第二連では「静かなる都会の空に／美しく燃える／炎」が、「瞬時に一切を滅ぼし尽せり」「すべての一切を燃え尽せり」と詠いゆく。「一切のもの」とは「資産も、工場も、大建築も／希望も、榮譽も、富貴も、野心も」と詠い示される。不動産・動産から抽象的な内面の価値観まで一切である。「乃木坂倶楽部」「虚無の鴉」「我れの持たざるものは一切なり」に連なる詩想であり、「われはもと無用の人」（「無用の書物」）に繋がる人生観、処世観である。第三連は再び第一連の三行を「いかなれば獣類の如く／汝は沈黙して言はざるかな」と、情熱の直ちに言葉にならぬことへの「いかなれば」をして冠して反復され、「さびしき憂愁に閉されつつ／かくも静かなる薄暮の空に／汝は熱情を思

ひ尽せり」と詠い収める。燃える炎は「思ひ尽す／熱情」である。それさえあれば「一切」が無用なのである。「小解」では「意志の烈しき悩みを知るもの」が「火」であるという。「熱情」である。そして更に「火よ！（略）眠りの恋歌を唄へよかし」と抒べられる。

これは次なる恋愛詩「地下鉄道にて」に及び、

ひとり来りて地下鉄道の

青き歩廊をさまよひつ

君待ちかねて悲しめど

君が夢には無きものを

朔太郎の言う「恋愛詩」の一。詩の終わりに「なに幻影の後尾燈」「なに幻影の恋人を」に通ず。掛詞。「との、朔太郎にしては冴えない付記がある。注記が必要なほどの稚拙な掛詞でもあるのか。青い駅の歩廊から真つ暗なトンネルが続く。恋の行方の暗澹を示す。開通した都市の新道は恋の活路とならない。<sup>(21)</sup>

第二部の最終詩は、再録詩「小出新道」である。

ここに道路の新開せるは

直として市街に通ずるならん。

われこの新道の交路に立てど

さびしき四方の地平をきはめず

暗鬱なる日かな

なに幻影の後尾燈

空洞に暗きトンネルの

壁に映りて消え行けり。

壁に映りて過ぎ行けり。

天日家並の軒を低くして

林の雑木まばらに伐られたり。

いかなぞ いかなぞ思惟をかへさん

われの叛きて行かざる道に

新しき樹木みな伐られたり。

私事に互るを許されれば、本詩は（新制の）高等学校一年の国語の時間の副読本に「大渡橋」とともに掲載されて

あつたために、私としては初めて自覚的に読んだ朔太郎詩である。その前年に戦時下過ごした父の郷里を後にして大阪に戻ったばかりで、他の詩を合わせて「郷土望景」の好悪の情は身に沁みて理解出来たものである。逼塞した時、迷妄したとき「いかにぞいかにぞ思惟をかへさん」が口癖になっていたのを憶えている（恥ずかしながら「いかにぞ」を「あかんで」の禁止形に誤解して）。「われの叛きて行かざる道」に、朔太郎の反骨、意地を見るべきで、『氷島』におけるこの詩の位置づけも奈辺にあると確信する。かくて第三部、ひいては後半部のトップの詩「告別」に繋がろう。

第二部は、すでに先取りして示したように、人生の破局の上に漂泊の悔いを重ね、人生過失の思いと「飢え」「渴き」による満たされざる思いの中に、多く巷間をさ迷う心情である。

## 九

第三部は、十六番詩と十七番詩の二篇のみである。そしてそれが詩集後半部の始まりとなる。

「告別」は第三部の中核を成し、『氷島』後半部の幕開けをする。『氷島』詩篇の中では、再録詩、旧詩の「監獄裏の林」、アフォリズム集『虚妄の正義』の序詩として書かれた「無用の書物」を除くと、同時発表（「ニヒル」創刊号昭和五・二）の他の二篇（「火」「動物園にて」）と合わせて、第一声の詩となる。

汽車は出発せんと欲し

汽罐かまに石炭は積たままれたり。

いま遠しづなるき信号燈と鉄路の向うへ

汽車は国境を越えて行かんとす。

人のいかなる愛着もて

かくも機関車の火力されたる

烈しき熱情をなだめ得んや。

駅路に見送る人々よ

悲しみの底に齒がみしつ

告別の傷みに破る勿れ。

汽車は出発せんと欲して

すさまじく蒸気を噴き出し

裂けたる如くに吠え叫び

汽笛を鳴らし吹き鳴らせり。

共に「汽車は出発せんと欲し」の詩句に導かれる最初の四行と終わりの四行は、石炭を積み、闘志を剥き出すように汽罐を最高度に燃焼させ、雄叫びのように蒸気を吐き、汽笛を鳴らしまきに出発せんとしている様である。その行く手は信号燈と鉄路のはるか向こう、国境をも越えんという。驀進あるのみの出発への気概が示される。詩は一方で出発する駅路に汽車を見送る人々に目を向け、最早火の着いた機関車の熱情を抑え得ぬこと、只々告別の悲しみと傷みのために破滅しないようにと勧告する。詩は汽車の側を主体にして、告別の悲しみを超えて出発せんとする勢いを詠う。が、いかんせん、汽車は出発しようとしていても、出発していないのである。

この「告別」の3〜10行の詩想に繋がるものとして、『氷島』に再録はされなかったが、「郷土望景詩」の最終篇「公園の椅子」の詩句が連想され、ここに蘇生されている感がある。

公園の椅子にもたれて

(略)

われの思ふことはけふもまた烈しきなり。

かくばかり

いかなれば故郷のひとのわれに辛く

つれなきものへの執着を去れ。

かなしきすももの核を噛まむとするぞ。

ああ生れたる故郷の土を踏み去れよ。

遠き越後の山に雪の光りて

(略)

麦もまたひとの怒りにふるへをののくか。

(「公園の椅子」部分)



「公園の椅子」は、「いかなれば故郷のひとのわれに辛く」、また「さびしき椅子に「復讐」の文字を刻みたり」と、「郷土望景詩」の憤怒等の由来するところ最も明確にしている詩篇である。そしてまた、『氷島』第四部を開始する「動物園にて」の詩句と連動する。<sup>(22)</sup>

再録詩「中学の校庭」は、『純情小曲集』の「郷土望景詩」篇ではその巻頭に置かれているものである。「望郷望景」の場面では、一番古きに還り、最も若い日に戻るものである。

われら中学にありたる日は

艶めく情熱になやみたり

いかりて書物をなげすて

ひとり校庭の草に寝ころび居しが

(「中学校の校庭」部分)

石川啄木の「不来方の城の歌」<sup>(23)</sup>がこの詩に面影される。「情熱」の語において「告別」の「熱情」につながるものである。止みがたい情熱、鬱勃として抑えがたい艶めく情熱の出発点として、また「郷土望景詩の後に」の中の「前橋中学」では「われの如き怠惰の生徒ら、今も猶そこにありやなしや」とあり、これは「小出松林」の「学校を厭ひて林を好み」にも通じる。「人生過失」の思いに繋がる。詩篇「告別」は、「漂泊の悔い」「人生過失の思い」からの脱却を願うが、それは川の彼岸、国境の向こうのあてどない地点へでしかない。「漂泊」も「過失」も遡れば人生のどの地点と定め得ないが、朔太郎はその里程標の最初を中学時代に定めたのではないか。「告別」のモチーフは、昭和五年二月発表の数カ月前という時期を想定すると、昭和二年末の「母なき子供等」を両親のもとに置き、単身上京したそのときの決意、決心を背景として生成していると思われる。「乃木坂倶楽部」での生活の前である。再出発のための「告別」という事態を想定すれば、『氷島』後半部の冒頭にあるにふさわしいのである。

「序詩」として「漂泊者の歌」を詩集巻頭に置き、後半部の最初に「告別」を排する。それは再出発を意味していいはずである。しかし、詩篇では決して出発したとは歌わない。「彼岸」や「国境」の向こうでは、そしてその先のアルカディアを持たぬ詩人には、「出発」はあらたな漂泊の始まりでしかない。<sup>24</sup>

## 十

第四部は、第十七番詩「動物園にて」、十八番詩「国定忠治の墓」、十九番詩「広瀬川」の三篇をもって成る。

「動物園にて」については、朔太郎は、詩篇発表後二年三か月を経た昭和七年五月の「蠟人形」に随筆「動物園」を發表し、

上野に近い田端に居た頃、私はよく動物園へ出かけて行つた。動物を見る為の興味ではなく、彼等の物悲しい本能に反映されてる、私自身の苦痛を噛みしめ、心を傷ましくして泣くためだった。とりわけ園内の木立の中に、落葉の積る晩秋の頃、私は一人でそこを訪ね、(略)憂愁に沈みながら歩き廻つた。そしてまた或る時は、心の痛み  
に耐へがたく、ノートに次のやうな詩を書いたりした。

と書いて該詩を紹介している。三節からなるこの随筆で右は「2」に当たるが、「3」には動物園で女人と待ち合わせた顛末が見られるが、その出会いを「今年の冬」と書くので、その前々年の発表の該詩には当たらない。「遊園地にて」「地下鉄道にて」と並べ立てれば、該詩の「——にて」も恋愛詩の暗号のようでもあるのだが。詩は「園内の(略)枯れ葉みな地に落ち」と季節を示し、その上で「猛獣は檻の中に憂ひ眠」り「みな忍従し(略)／人の投げあたへる肉を食らひ／本能の蒼き瞳孔に／鉄鎖のつながれたる悩みをたえたり」と「彼等の物悲しい／本能の苦痛」を認める。

暗鬱なる日かな！

わがこの園内に来れることは

彼等の動物を見るに非ず

われは心の檻に閉ぢられたる

飢餓の苦しみを忍びて怒れり。

百たびも牙を鳴らして

われの欲情するものを噛みつきつつ

さびしき復讐を戦ひしかな！

(「動物園にて」部分)

詩意のあらまはしは随筆に記されるとおりである。「暗鬱なる日かな！」は、感嘆符はないものの同じ詩句を「小出新道」が既に措辞している。同じ事実を指摘する安藤靖彦氏は、「動物園」の「忍従」と「小出新道」の「忍従」と二重映しになっているという。<sup>(25)</sup>「小出新道」は、開化の波及としての新道の新開に同一性を得られぬところにプロテストしているもので「忍従」の識域ではない。それよりも「動物園にて」においては、詩の冒頭二行の「灼きつく如く寂しさ迫り／ひとり来りて園内の木立を行けば」と、最終二行の「ああ我れは尚鳥の如く／無限の寂寥をも飛ばざるべし」と、深く切迫する「寂寥」に身を置いていることである。「灼きつく如き」「寂しさ」は、実をも灼き尽くすほどの意である。本詩には後で今一度たち帰る。

#### 国定忠治の墓

わがこの村に来りし時

上州の蚕すでに終りて

農家みな冬の鬩を閉したり。

太陽は埃に暗く

悽而たる竹藪の影

人生の貧しき惨苦を感ずるなり。

見よ 此処に無用の石

路傍の笹の風に吹かれて

無頼の眠りたる墓は立てり。

ああ我れ故郷に低徊して

此所に思へることは寂しきかな。

久遠に輪廻を断絶するも

ああかの荒寥たる平野の中

日月我れを投げうつて去り

意志するものを亡び尽せり。

いかなぞ残生を新たにするも

その蕭条たる墓石の下に

汝はその認識をも無用とせむ。

——上州国定村にて——

本詩の第一連、最初三行に示される冬を、「小解」では「昭和五年の冬、父の病を看護して故郷にあり。人事みな落魄して、心烈しき飢餓に耐えず。ひそかに家を脱して自転車に乗り、烈風の砂礫を突いて国定村に至る。」と書いている。その時「路傍に倨して詩を作る」とある。初出時、付記には「上州国定村にて、一九三三年一月」とあり、「小解」とはその制作の時期が齟齬する。ただ、八年一月は代田に家を新築し居を移している。恐らく帰省はなかつたものと思われる。詩篇の注解にあたっては種々苦心の跡が見られるが、昭和八年一月に詩篇は制作されたが、核となる国定忠治墓への「墓参」体験は昭和五年冬と判断すべきものと思う。朔太郎が父危篤の報に乃木坂倶楽部を引き払つての帰省は昭和四年十二月も押し迫つてからである。父は翌五年七月の逝去だから「小解」の言う「昭和五年の冬」は同年の年頭である。詩篇冒頭の「わがこの村に来りし時／（略）農家みな冬の鬩を閉したり」は、農閑期の村居ながら朔太郎への上州の拒絶の姿勢も窺える。朔太郎の側から言えば疎外感である。<sup>27</sup>

第一連は忠治の墓への感懐が詠われ、「人生の貧しき惨苦を感ずるなり。／見よ此処に無用の石／路傍の笹の風に吹かれて／無頼の眠りたる墓は立てり。」に朔太郎の忠治の生の受け止め方が求められる。「人生の貧しき惨苦」「無用の石」「無頼の眠りたる墓」は決して肯定的な表現ではないが、己が人生に通じ合うものを感じ取していよう。「無用

の石」は那珂太郎氏解のように「無用の（人の）石」であると見られる。<sup>(28)</sup>「無用」はまた「無益（益なき）」である。墓辺墳上の詩がもし『新体詩抄』で新たな一頁を開いたものとすれば、<sup>(29)</sup>人生の足跡の偉大さを詠ったものでないこの詩は系列を外れるものである。第二連は忠治墓辺に佇って「故郷に低徊」する己の人生を反照する。「故郷に低徊して／此所に思へることは寂しきかな」と人生を無寥、つまりは寂寥の思いで総括しながら、「荒寥たる平野／日月」が「我れを投げうつて去り／意志するものを亡び尽せり」という思いに「いかんぞ残生を新たにするも／その蕭条たる墓石の下に／汝はその認識をも無用とせむ」と、ここでも「いかんぞ」に唱導されて、極めて人生虚無の認識を打ち出していることである。これは第五部詩篇の基調となるもので、朔太郎の「漂泊」は「久遠の輪廻」を断ち切つて「久遠の郷愁」（「漂泊者の歌」）をその彼方に望み得ないのである。「漂泊者の歌」の「序詩」たり得ることはここでも確認できる。

そしてこの「墓辺墳上の詩」には、時を置いて作られる、体験としては「昭和五年の冬」に極めて近い、いま朔太郎の一つの「墓辺墳上の詩」である「父の墓に詣でて」（先引の散文詩「物みなは歳日と共に滅び行く」所掲）の思いに連動する。

わが草木とならん日に

われは飢ゑたりとこしへに

たれかは知らむ敗亡の

過失を人もゆるせかし。

歴史を墓に刻むべき

過失を父もゆるせかし。

この詩の詩句「わが草木とならん日に」こそ、「国定忠治の墓」第二連の思いなのである。那珂氏の言う「つひに自らが墓石と化する日を、まざまざと見て、おのれの感懐をのべるの」<sup>(30)</sup>である。

第四部最終篇は「広瀬川」である。

広瀬川白く流れたり

過去の日川辺に糸をたれしが

時さればみな幻想は消えゆかん。

ああかの幸福は遠きにすぎさり

われの生涯らいふを釣らんとして

ちひさき魚は眼にもとまらず。

「小解」では「広瀬川今も白く流れたれども、わが生の無為を救ふべからず」と書き記す。郷里にあつて多くのものが変り滅びゆくなかで、常に不変のもの意識される「広瀬川」は、その詩篇では「生涯を釣らん」とする若き日の生の傲慢、倨傲とは裏腹に幻想として消滅することを予知している。「虚無」の思いの原初としてここに収録され第五部への橋渡しとなるのである。

#### 公園の椅子

人気なき公園の椅子にもたれて

苦しみの叫びは心臓を破裂せり。

われの思ふことはけふもまた烈しきなり。

かくばかり、

いかなれば故郷のひとのわれに辛つらく

つれなきものへの執着をされ。

かなしきすももの核たねを噛まむとするぞ。

ああ生れたる故郷の土を踏み去れよ。

遠き越後の山に逝きの光りて

われは指にするどく研けるナイフをもち

麦もまたひとの怒りにふるへおののくか。

葉桜のころ

われを嘲けりわらふ声は野山にみち

さびしき椅子に「復讐」の文字を刻みたり。

先にも引いた『純情小曲集』『郷土望景詩』編の最終詩。故郷への憤怒と断絶の思いをこの詩篇に託し、ある時期の生を思い括つたのである。「動物園にて」の詩句「さびしき復讐を戦ひしかな！」の思いの実態は、この詩篇に明らかである。しかし『氷島』にはこの詩は再録されなかった。それは朔太郎が「憤怒」超えたところ、「一切を失ひ

## 十一

『氷島』第五部は、二十番詩「虎」から二十四番詩「監獄裏の林」までの五篇である。先述したように二十五番詩「昨日にまさる恋しさの」は、「序詩」に対応する「終詩」として位置づける。

「虎」は旧題（初出時）「屋上の虎」、銀座松坂屋屋上の動物園に飼われる虎が詩材である。全三連、二十七行から成る。『氷島』中では長詩の部類に入る。第一連、第三連が「虎なり」で詠い出され、詩中「虎なり」が五度反復される。屋上の檻に飼われる虎に自己との同一性を感じ取るうとして、また付与しようとしての表現である。<sup>(31)</sup>すでに詩篇「動物園にて」で「われは心の檻に閉ぢられたる」という一句に接している。「牙齒もて肉を食ひ裂くとも／いかなぞ人間の物理を知らむ。」はその端的な表われである。「物理」はもとより PHYSICS に非ずして「(人の世の)物の理り」である。「百貨店階屋の檻に眠」る、「薄暮に迫る都会の空／高層建築の上に遠く坐り」、「昇降機械<sup>えれべえたあ</sup>の往復する／東京市中繁華の屋根に／琥珀の斑なる毛皮をき」ている虎、「旗の如くに飢ゑ」「曠野の如くに寂しむもの」である虎、それらを受けて「虎なり！／ああすべて汝の残像／虚空のむなしき全景たり。」と詠い収める。安藤氏はこれの主体を虎とするが、<sup>(32)</sup>主体が「汝」に対する「我れ」である。「一切無」の世界である。初出形からの改作が、詩集編纂時とすればその時期の朔太郎の詩意識に、はからずも測鉛を下ろし得ているのである。といつてもその間にそんなに大きな時差はない。

無用の書物

無用の書物（初出）

蒼白の人

（虚妄の正義の序詩として）

路上に書物を売れるを見たり。

肋骨あばらみな痩せ

軍鶏しゃもの如くに叫べるを聴く。

われはもと無用の人

これはもと無用の書物

一銭にて人に売るべし。

冬近き日に裕をきて

非有の窮乏は酔えはてたり。

いかなれば涙を流して

かくも黄色く古びたる紙頁ぺえちの上に

わが情熱するものを情熱しつつ

寂しき人生を語り続けん。

われの認識は空無にして

われの所有は無価値と尽きたり。

買ふものはこれを買ふべし

路上に行人は散らばり去り

烈風は砂を巻けども

わが古き感情は叫びて止まず。

蒼白の人

路上に書物を売れるを見たり。

肋骨あばらみな痩せ

軍鶏しゃもの如くに叫べるを聴く。

われはもと無用の人

これはもと無用の書物。

一銭にて人に売るべし。

冬近き日に裕をきて

われの窮乏は酔えはてたり。

風吹く巷に行人散り

古き友情さへも我れを知らず。

いかなれば涙を流して

かくも黄色く古びたる紙頁の中に

わが情熱するものを情熱しつつ

さびしき宇宙を独り語らむ。

ああ我れはもと無用の人

無用の書物を街に売るべし。



見よ！ これは無用の書物

※傍線部異同の生じた部分。

一銭にて人に売るべし。

二十一番詩「無用の書物」には、初出と比べて少なからぬ異同が見られる。全一連は変わらぬが、詩行が一七行から二一行に増える。増えるだけでなく行の加除が為されている。詩句の異同にも注意を払う要がある。

ここでは作品論を展開する余裕もなく、それを為せば詩篇への理解を増そうが、論のベクトルを拡散させる。詩集形と初出形を比較して言えば、非有、所有の無価値が強く出されていること、寂寥の人生を独白でなく、語り続ける意志が示されること、無価値であつても「買ふものはこれを買ふべし」の詩行の挿入で、それでもよければ買えばいいとの志を顕らかにしたこと等が上げられる。「いかなれば」に続く詩句に異同がないのは、詩の中核、肝腎が不動である証である。「無用」に居直ることで、却つて意義を見出す、新たな展開である。「蒼白の人」は、他者視された自身の像であることは言を俟たない。「蒼白」のトーンは、朔太郎詩にかつてないものである。『月に吠える』の病める人の色相と異なり、『青猫』の色合いとも質を違える。論証を後の機会に委ねて言えば「青白きインテリ」、実生活から復讐される瘦せ細つた知識人のイメージである。

二十二番詩「虚無の鴉」は、全五行、『水島』中最短の詩篇である。初出時タイトルは「否定せよ!!!」で、一行目の「虚無」に「」が付される。

我れはもと虚無の鴉

季節に認識ありやなしや

かの高き冬至の家根に口を開けて

我れの持たざるものは一切なり。

風見の如くに咆哮せむ。

前詩の「もと無用の人」「もと無用の書物」ともども「もと虚無の鴉」との表現は、元もと無用であった、虚無で

あった、本来そうであった、今に始まったことでない、と言わんとするにある。「我れの持たざるものは一切なり」の一切の非所有は、非所属であり、「漂泊者」にふさわしいアナーキーな存在である。この一行はそのまま次詩の題名になる。この二篇、もともと同時発表の作だけに、関連性は濃いものと思われる。

第二十三番詩「我れの持たざるものは一切なり」は、郷土望景詩篇、恋愛詩篇以外の詩としては、最後の詩篇である。

我れの持たざるものは一切なり

いかんぞ窮乏を忍ばざらんや。

独り橋を渡るも

あと灼きつく如く迫り

心みな非力の怒に狂はんとす。

ああ我れの持たざるものは一切なり

いかんぞ乞食の如く羞爾しゅうじとして

道路に落ちたるを乞ふべけんや。

捨てよ！ 捨てよ！

汝の獲たるケチくさき名誉と希望と、

汝の獲たる汗くさき錢を握つて

勢ひ猛に走り行く自動車あとの後

枯れたる街樹の幹に叩きつけよ。

ああすべて卑穢なるもの

汝の非力なる人生を抹殺せよ。

一切非有の自己に更にながり捨てよと迫る詩である。最終行「汝の非力なる人生を抹殺せよ」の初出形は「汝の処世する人生を抹殺せよ」である。単なる「世渡り術」を捨てて「非力」ゆえに招来した人生そのものを否定する。そしてその前に「すべて卑穢なるもの」「ケチくさき名誉と希望」「汗くさき錢」をも抹殺せよと自己に強いる。詩篇前半は、いかにしても窮乏を忍ぼうとして、決して羞恥を失った乞食のようではなく、あくまでも矜持を保とうと言うにある。ふり絞るような述志と悲愴な生への決意の詩である。

監獄裏の林に入れば

囀鳥高きにしば鳴けり。

いかなぞ我れの思ふこと

ひとり叛きて歩める道を  
寂しき友にも告げざらんや、

(「監獄裏の林」冒頭部分)

右の二十四番詩「監獄裏の林」は、再録詩を除けば最古の発表のもので、大正十五年四月の発表である。発表した当時、詩人であるからにはいずれ将来の詩集への編入を想定していたろうが、このような形での詩集編入は予測されていなかったであろう。

詩集への編入は詩篇冒頭部分に関わろう。「背後うしろに櫛くしの林を負ひ、周圍みな平野の麦畠あはれに囲まれたり。我れ少年の日は、常に麦笛を鳴らして此所を過ぎ、長き煉瓦の塀へいを廻りて、果なき憂愁をさびしみしが」と「小解」に記されている。少年の日に関わる、少年の日に始まる何かである。——詩人の詩中に表白された言葉を借りれば「憂愁」「寂寥」である。この詩に即して言えば、世に叛いての孤独である。

暗鬱なる思想かな

ああ季節に遅く

われけものの破れたる服を裂きすて

上州の空の烈風に寒きは何ぞや。

獣類けもののごとく悲しまむ。

(「監獄裏の林」部分)

就労する囚人に関わる部分を除くと「監獄裏の林」は、冒頭と右の部分になる。「われの思ふこと」が「暗鬱なる思想」である。

第三部から第五部に至る『氷島』後半部は、「家郷」を絶たれた「漂泊者」の人生虚無、寂寥の思いであった。而して詩人は深い寂寥の境に閉ざされる。「寂寥の人」の境涯である。そして上州の自然の度を超えた荒涼、寒気の凄烈、酷薄である。

その点については後述する。

十二

朔太郎が『氷島』の巻軸に置いたのが「昨日にまさる恋しさの」である。所謂「恋愛詩」の一つである。稿者はそれを「終詩」として位置づける。

昨日にまさる恋しさの

湧きくる如く嵩まるを

忍びてこらへ何時までか

悩みに生くるものならむ。

もとより君はかぐはしく

阿艶あでに匂へる花なれば

我が世に一つ残されし

生死の果の情熱の

恋さへそれと知らざらむ。

空しく君を望み見て

百たび胸を焦がすより

死ねば死ぬかし感情の

かくも苦しき日の暮れを

鉄路の道に迷ひ来て

破れむまでに嘆くかな

破れむまでに嘆くかな。

——朗吟調小曲——

「読者は声に出して読むべき」（「自序」）と、朔太郎によって要請される『氷島』の詩篇の中でもこの詩は「朗吟調小曲」と打たれるだけに、憤慨、激昂の「慷慨」調の沈潜された、また「愛憐詩篇」の抒情小曲時代に立ち返ったかのようなメロディアスなリズムを回復した詩でもある。

それはさておき、詩中の句点に従うと、詩篇は三つの部分から成り立つ。各部は四行、五行、七行と漸増的であつ

て、「昨日にまさる恋しさ」の高まりが、漸増法による詩意（思惟）の増幅、昂揚をはかっている。第一部分では人または人生は「忍びてこらへ何時まで」も「悩みに生くるものならむ」という覚悟を、第二部分には、その女性像はひと月前に発表された「殺せかし！ 殺せかし！」の女性の面影を色濃く宿すが、その人との恋が「我が世に一つ残されし／生死の果の情熱の」ものとさえ知らなかったとの告白を、それらを受けて第三部では、届かぬ思いにその人を遠く見て焦慮するより「死なば死ねかし」とまで思い詰める。果ては「破れむまでに嘆くかな」と身の破綻せんばかりを詠ずる。『氷島』刊行直後と云つていい時期に『氷島』の詩は僕の生活の最大危機に書いたもので、背後にはすべて自殺の決意さえひそんで居たのだ（「狼言」昭和十二・12）と朔太郎は書く。「狼言」は三好達治の『氷島』批判に<sup>(33)</sup>応じたものだが、「昨日にまさる恋しさ」の「死なば死ねかし感情の／かくも苦しき日の暮れを／鉄路の道に迷ひ来て」の詩句は、その意味では暗示的かつ暗合的である。しかし「破れむまでに嘆くかな／破れむまでに嘆くかな」と悲嘆的な詠嘆に終わっている。そしてこの鉄路で悲嘆にくれる自己像とはどのようなものなのか。「続ける鉄路の柵の背後に／一つの寂しき影は漂ふ」（「漂泊者の歌」）その人である。この点に関しては「序詩」に触れた際に、注意を喚起して置いた。序詩と見事に呼応していて、あてどない漂泊にいかんともしがたい孤独な寂寥の相が形象されるのである。寂寥と虚無の中の孤影と云つてもよい存在である。かくして詩集の世界は形式的には完結する。円環すると言つてもよからう。

### 十三

『氷島』詩篇の排列を改めて見てみると、発表時によってそれぞれ一固まりになっている。「郷土望景詩」の諸篇、初出未詳詩を別にすれば、発表順に整理すれば次のグループになる。

- ・昭和二年初頭のもの 2篇 22 虚無の鴉 23 我れの持たざるものは一切なり
- ・昭和五年初頭のもの 4篇 12 火 15 告別 17 動物園にて 21 無用の書物
- ・昭和六年初頭のもの 6篇 3 乃木坂俱樂部・5 帰郷 7 家庭 8 珈琲店 醉月 9 新年 11 品川沖観艦式
- ・昭和六年半ばのもの 2篇 1 漂泊者の歌 2 遊園地にて
- ・昭和六年後半のもの 2篇 4 殺せかし！ 殺せかし！ 25 昨日にまさる恋しさの
- ・昭和八年半ばのもの 2篇 18 国定忠治の墓 20 虎

「恋愛詩四篇」に数えられる「昭和六年後半のもの」二篇を除けば、例外なく同時発表、近時に発表されたものは連続している。ひとかたまりになっている。12—15、3—5、9—11、18—20のようにここでの排列番号が飛んでいる場合は、その間に再録詩を含めた「郷土望景詩」、「恋愛詩」、「初出未詳詩が挿入されていることになる。初出未詳詩も「恋愛詩」のうちだから「郷土望景詩」と「恋愛詩」は解体、分散されて詩集内に配置されたことになる。その典型は「昭和六年後半」詩篇で「昨日にまさる恋しさの」が巻軸詩として、稿者の言う「終詩」として置かれている。また、それらを挿入することによって、ひと続きと解しかねられない詩篇を分断し、新たな構成秩序を生むのである。

仮に『氷島』が発表順に詩篇を並べていたとしたら、まず巻頭詩は「監獄裏の林」となり、その後一切非有、虚無の詩群、憤怒をマグマとする心の飢え、渴えを訴える精神の精神の飢餓、生活の空白の詩群、次いで夫婦不和、家庭崩壊、その後の無聊を嘆く詩群、次いで恋愛詩のグループ、最後の「昭和八年半ばのもの」の二篇は、かく相連接すること、故郷に死して「無用の石」に化さんか、都会に出て「檻の虎」の如くむなしく自由の許されない孤独の飢えに耐えるか、扱一の許されがたい、困難な閉塞された状況を提示する<sup>34</sup>。これはこれでまた別の構成秩序、詩的世界

を形成するものと言えるし、詩集『氷島』最終部に置かれた二十二番詩、二十三番詩の「一切非有、虚無」の詩情ないし詩精神がむしろ『氷島』初期に形成されていたことが確認出来て興深いものがある。また、家庭崩壊の詩群の後に「恋愛詩」篇が続くなどある意味では対女性の詩の形成は精神的ステップを踏んでいることが窺える。かように詩篇発表順（即制作順か）のオーダーに一定の秩序とそこから形成される世界に意義があるとすれば、朔太郎がその順序を変えて『氷島』の新たな秩序と世界を目論んだとき、発表時期の近い詩篇の連続性を保ちながらもその緊密性の呪縛を超えるために「郷土望景詩」の挿入を必然とし、「自序」で言う漂泊の生に時に望見する「極光」の「恋愛詩篇」の適宜な配置を必要としたのである。以上が本稿の『氷島』詩篇の構成論の全部と成立論の一端である。

『氷島』の刊行は昭和九年六月、先述したように朔太郎がその出版、編集を意図し、準備をし始めたのがその前年・昭和八年の九月頃からと推定される。当時はすでに創作面では、散文詩と劃線のないアフォーリズムにほぼ全面的に傾斜している。生活面では、昭和五年七月に父を失い直ちに家督相続者になっている。医師ではない朔太郎が父の医業を継ぐべくもないが、その方は大正八年秋に父・密蔵が高齢で開業医を廃した時に、同所で義弟（妹ユキの結婚相手）の津久井惣次郎が名義を改め（「津久井医院」）て、すでに実質的な継承者になっている。朔太郎は子供二人、母、妹アイと、昭和六年九月から東京・下北沢で生活を始め、昭和八年の初頭から新築した同じ世田谷・代田に移っている。父の遺産に負うところ大とは言え、朔太郎は朔太郎なりに長子・家督相続者としての責めを果し始めたものを見做せる。こうした結果、当然かれの生は安定志向を見せ始め、『氷島』刊行の翌月から明治大学文芸科講師を引き受け、漸次執筆や詩壇的交友、活動を活発化している。またその観点からの再婚を模索している。

そうした時、己が人生の時間軸に沿っての「実生活」譜や折々に胚胎する思惟の展舒ではなく、「極光」を望み見る「漂泊者」の位相から「寂寥の人」への転換、人生の激動・蕩揺を経て、一切無、飢餓渴望の線に構成されたので

ある。それは現実の朔太郎の生の情況に支配されたものと思われる。最初に指摘したように「自序」の「著者の過去の生活は、北海の極地に漂ひ流れる、侘しい氷山の生活だつた」に、彼の漂泊が過去のこととして清算的な響きを持つと述べておいたのは、まさしくこのような朔太郎の生の情況を反映したものである。同じく「自序」の「切実に書かれた心の日記」であり得ても、人生上、生活上の人生の重要な出来事、事項の全てが詩材化されているわけではない。従つて「実生活」そのものの「記録」を超えた新たな生の軌跡を構築しようとしたものと考えられる。先の「コンパスの交差」をこの辺に求めたい。

#### 十四

最後に『氷島』の詩語と形式・韻律に簡単に言及して稿を閉じたい。『氷島』の詩語は文語（朔太郎の用語に従えば「文章語」）であり、一部の詩篇は朗吟されることを意図して七五調を採っている。今日なお口語自由詩を完成させた近代詩の成立の赫奕たる栄誉を担う『月に吠える』の著者萩原朔太郎が再び文語を用い、ものによつては定型韻律を為している。こうした指向と試行は、「自序」で「詩のスタイルを同一にし」と書かれるように「郷土望景詩」時代に始まるわけである。もちろん朔太郎の詩的出発である「愛憐詩篇」（「郷土望景詩」と合わせて『純情小曲集』一卷となる）は、詩史的環境から当然の如く文語定型韻律となっている。「郷土望景詩」や『氷島』の詩篇は用語と形式・韻律の上で詩史に逆行しているのではないかという問題が生じる。そのこともあつてか、朔太郎は詩集刊行後のおよそ二年後『氷島』の詩語について「なる一文を草している（「四季」昭和十一年七月号）。

「氷島」の詩は、すべて漢文調の文章語で書いた。これを文章語で書いたといふことは、僕にとって明白に「退却」であつた。なぜなら僕は処女詩集「月に吠える」の出発からして、古典的文章語に反抗し、口語自由詩



の新しい創造と、既成詩への大胆な破壊を意表して来たのだから。今にして僕が文章語の詩を書くのは、自分の過去の歴史に対して、たしかに後方への退陣である。<sup>(35)</sup>

さらにまた、

要するに「氷島」の詩語は、僕にとつての自辱的な「退却」だった。その点から僕は、この詩集を甚だ不面目に考へてる。

前者は該文の書き出し部分、後者はその最終部分である。口語（日常語）自由詩への志向は『新体詩抄』からこなたへ詩史的にも、自詩の展開の上でも『氷島』の詩語が「退却」「退陣」と受け止めている。もちろん『氷島』を考へる場合、同じ文章で

しかし「氷島」を書く場合、僕には文章語が全く必然の詩語であつた。換言すれば、文章語以外の他の言葉では、あの詩集の情操を表現することが不可能だつた。

とも書く。『氷島』を論じる場合、この「文章語が全く必然の詩語であつた」要素を視座に加える必要があるが、ここでは別の角度から私見を出して置きたい。評者の多くは、朔太郎の事情に理解を示しつつ、やはり詩語的、形式的には同様に「後退」として捉えているようである。この面での本格的な考察は後日を期し、まだ多くの人の論及していない、あるいは着眼していない観点からある示唆をなして本稿を終えることとする。つまり、詩史的には当時すでに用語や形式について朔太郎の「退却」「退陣」などの語を超えた、もっと新たな地平が開かれ始めているところとある。

『氷島』詩篇の多くは昭和一桁年代の発表（制作）である。また、「郷土望景詩」は大正末、詩集刊行（大正十四・8）に近い時期の制作である。それぞれのピイクは、前者では昭和六年三月の「詩・現実」に発表された「叙情詩七

篇」であり、後者については昭和十二年の春頃からは制作に打ち込み始めたようだが、形を現わすのは前書き、詩篇解説と合わせて詩篇四篇を載せる「日本詩人」大正十四年六月号である。そうした時点を確認した上で以下の如く朔太郎詩のみから詩史上の詩語・形式・韻律を考える視野狭窄から脱したいものである。

例えば、中原中也の『山羊の歌』の「みちこ」詩篇中に「無題」なる作品がある。この詩は「I」から「V」の、その一つ一つが独立した詩篇として扱われてよい五つのパートから成り立つ詩である。この詩の「III」がまず「白痴群」創刊号（昭和四・4）に「詩友に」の題で発表され、昭和五年四月の発行の「白痴群」第六号において「無題」I～Vの全容が登場したものである。制作は「III」については昭和四年一、二月頃、全篇の完成は発表に近い時期であると推定される。<sup>(37)</sup>

中原中也「無題」詩篇、それは、こんな詩である。

こひ人よ、おまへがやさしくしてくれるのに、

私は強情だ。ゆうべもおまへと別れてのち、

酒をのみ、弱い人に毒づいた。今朝

目が覚めて、おまへのやさしさを思ひ出しながら

私は私のけがらはしさを嘆いてゐる。そして

——「無題 I」冒頭部分——

彼女は荒々しく育ち、

たよりもなく、心を汲んでも

もらへない、乱雑な中に

生きてきたが、彼女の心は

私のより真っ直いそしてくらつかない。

——「無題 II」第二連——

彼女の心は真っ直い！

かたくなにしてあらしめな。

かくは悲しく生きん世に、なが心

まるで自分を罪人でもあるやうに感じて。

われはわが、したしきにはあらんとねがへば  
なが心、かたくなにしてあらしめな。

——「無題 Ⅲ」第一連——

幸福は既の中にある

藁の上に。

幸福は

私はおまへのことを思つてゐるよ。

いとほしい、なごやかに澄んだ気持の中に、

和める心には一挙にして分る。

昼も夜も浸つてゐるよ、

——「無題 V 幸福」第一連——

それぞれに部分的な引用に過ぎぬが、「Ⅰ」は十六行全一連の口語自由詩、「Ⅱ」は各連六行三連の自由口語詩、「Ⅲ」は文語によるソネット、定型詩である。すべてが定型韻律ではないが、七音、五音を基調としている。「Ⅲ」は口語の定型のソネット、音数律はない。「Ⅴ」は各連四行、五連から成る口語自由詩である。偶数連は各行二字下げである。一つの作品に口語・文語、用語・形式・韻律を定型、自由の制約なく持ち込んでいる。それは『山羊の歌』、ひいては中原中也詩の全体に見られるものである。用語、形式、韻律の、かくあらねばならぬという制約を抜けて、自在になっている。つまりは、一つ一つの詩篇の内容、作者の内的必然、自己の要求に従つて用語、形式、韻律を自由に選択し、表現するのである。同様の傾向は、中也と同時代の三好達治（『測量船』）、伊東静雄（『わがひとに与ふる哀歌』）等の中にも認められるものである。また、より日常語に近い、平易な口語の詩が、朔太郎『月に吠える』と同時代の室生犀星（『抒情小曲集』）『愛の詩集』、高村光太郎（『道程』）、武者小路実篤（『無車詩集』）、あるいは千家元麿（『自分を見た』）等によって、より新しくは立原道造（『萱草に寄す』）『暁と夕の詩』によって達成されてい

るのである。<sup>(38)</sup> そうした観点に立てば、『氷島』の詩（詩語）をもって「退却」「退陣」を気にかけるようでは、その詩観に、詩史の動向においてもはや朔太郎は先覚性を、尖鋭性を喪失しているのではないか。むしろその方が問題が大きく重要で、朔太郎の詩人として、特に抒情詩人としての創造性の脆弱化、喪失をこそ問われねばなるまい。

※ 本論稿中、『氷島』詩篇の引用提示は、『萩原朔太郎全集』第二卷（筑摩書房昭和五十一・3）収録の『氷島』に拠った。なお詩集『氷島』初版複製によって照合している。また、萩原朔太郎の詩・文章の引用はすべて筑摩書房版『萩原朔太郎全集』（全十五巻）に拠っている。

※※ 先行研究・先行論考からの引用の注記は、すべて所見のものに拠っている。

## 注

(1) 室生犀星の詩作は、『抒情小曲集』時代には、その背景に八〇〇篇を超える詩篇が存したと言う。また『定本室生犀星全詩集』全三卷（冬樹社 昭和三十三・11）には二、一五〇篇超の詩が収められる。稿者の算定では二、一五六篇である。ただし再度の追試は行っていない。

(2) 前記『萩原朔太郎全集』第一、第二卷によって稿者が算定。

(3) 『氷島』巻末の「詩篇小解」に従い、本論稿では『氷島』再録詩の扱いを『純情小曲集』『郷土望景詩』編からの「波宜亭」「小出新道」「中学の校庭」「広瀬川」に限ったが、実際には次の三篇も先行する全詩集・選詩集に収録されている。

・「監獄裏の林」……『萩原朔太郎詩集』（第一書房 昭和三・3）

・「我れの持たざるものは一切なり」「虚無の鴉」……『現代詩人全集第四卷』萩原朔太郎集』（新潮社 昭和四・10）

(4) 「冬日暮れぬ思ひ起こせよ岩に牡蠣」の句についてはいまのところ明快な解釈、詩集での意義づけは為されていない。富士川英郎氏は「岩にしがみついた牡蠣も、冬の夜の闇のなかに一様に没してしまうというのは、何ものかを頼りにして、それ

にしがみついでいながら、そのものもろともに闇の中に消えて、押し流されてしまう、人間実存のはかなさ、頼りなさを暗示しているのではなからうか。」と解している。富士川氏が紹介する福永武彦の解には「冬の海の暮れて行くところ牡蠣にさへもしがみつく岩があつた。しかし自分には「宿るべき家郷」はない。「思ひ起せや」とある中七字が、上と下との季語の重複を詩的に処理してゐる。これは作者が冬の海を見ての矚目吟ではなく、その場所のない作者の想像、言ひ換へれば作者の内部風景の喚起であり、それも自ら浮び上つたといふのでなく、意志を以て自分に喚起を命じてゐる。」(『水島』一説)とある。嶋岡晨氏は「あるいは、『水島』一巻を編みながら、朔太郎は「牡蠣の殻」の詩人・蒲原有明を思い起こしていたのかも知れない。」とし、朔太郎のエッセイ「詩に告別した室生犀星君へ」(『文芸』昭和九年九月号)を通し、有明を訪ねた朔太郎との間に西欧亜流の詩より俳句に惹かれる点において意志の疎通があつたことを記している。

・富士川英郎「詩集の話最終回「萩原朔太郎『水島』」(『海』16巻2号 昭和五十六・2 中央公論社)  
 ・嶋岡晨『伝記萩原朔太郎下—〈虚妄〉の時代—(『水島』の季節)』(春秋社 昭和五十五・9)

本句の解釈、意義づけについては本稿の主題とはしない。従つて注記の範囲で私解を示しておきたい。「思ひ起こす」(思ひ遣す)は、「気を奮い立たせる」の意と「過去あるいは別な地点、過去のある時点から当地、現時点を思う、思いやる」の意とがある。この俳句には「我が心また新しく泣かんとす」の詞書が付されている。『水島』「自序」に記された「昭和九年二月」とほぼ同時の作であろう。「新しく泣かんとす」には「著者の心の上には、常に極地侘しい曇天があり、魂を切り裂く水島の風が鳴り叫んで居る。さうした痛ましい人生と、その実生活の日記とを、著者はすべて此等の詩篇に書いたのである」という「自序」の思いを新たに「泣かんと」したゆえんである。句意はそうした消沈した思いを「奮い立たせよ」う、不動の巖にしがみつく牡蠣のようにと言うにある。ひとまずそう解しておきたい。なお、『水島』で唯一「牡蠣」の語に触れるのは、「詩篇小解」の「品川沖観艦式」の項で、「暗澹として碇泊し、心みな錆びて牡蠣に食はれたり」と言う。いまのところ右俳句の解に援用できないでいる。

(5) 富士川英郎「萩原朔太郎『水島』」前掲

(6) 「詩集『水島』」は、明治開明期の懐古的装幀として、表紙の色あひから華型封明朝体の活字まで面白いと思ふ。」(『書物展望』4巻4号 昭和九・9)

(7) 次のような研究・評論文献を拾うことができる。

- ・中山智恵子『『氷島』と「郷土望景詩」』（『大妻国文』第十二号 昭和五十六・3）
  - ・中山智恵子『『氷島』と「郷土望景詩」2』（『大妻国文』第十三号昭和五十七・3）
  - ・林浩平「萩原朔太郎「郷土望景詩」から『氷島』へ」（『東横国文学』第二十六号 平成六・3）
  - ・藤原定『幻視者萩原朔太郎』『『氷島』と「郷土望景詩」』（『麦書房昭和五十二・3』）
  - (8) 伊藤信吉氏は『萩原朔太郎Ⅱ虚無的に』（北洋社 昭和五十一・8）の中で、「郷土望景詩」を「哀傷において」と「激越において」とに二分している。『氷島』編入の「郷土望景詩」のうち「哀傷において」に属するものは「中学の校庭」「波宜亭」「広瀬川」、「激越において」に属するものは「小出新道」「監獄裏の林」である。一応バランスをとって採られている。問題は、何処にどういふふうに着かれているかと言うことである。
  - (9) 富士川英郎「萩原朔太郎『氷島』」前掲
  - (10) 『氷島』詩篇の制作日を特定することはごく一部を除いて不明である。前掲『氷島』の詩篇一覧に明らかのように「地下鉄道にて」を除いて初出誌は明らかである。発表年月順ではないが、おおむね同年次、制作年次の近いものは固まって並べられている。
  - (11) 安藤靖彦『萩原朔太郎の研究』『『氷島』の構造』（明治書院 平成十・12）／安藤靖彦『『氷島』の構造』（『愛知県立大文学部論集』第40号一九九二・2）
  - (12) こうした観点（ある一定の意識の下に編集されている）に立つての『氷島』論はほとんどないと言ってよいのではないか。わずかに小松郁子氏が（略）収録四編の恋愛詩の配置に恋の構図の意図を見ている程度である。（安藤靖彦『『氷島』の構造』前掲）
- 右に紹介されるのは、小松郁子『萩原朔太郎ノート「女人」考―『氷島』の恋愛詩をめぐって』（蒼洋社 昭和六十一・3）である。前注 林浩平「萩原朔太郎「郷土望景詩」から『氷島』へ」では、『氷島』詩篇を六つの系列グループに分類している。
- ①「郷土望景詩」系列のもの「国定忠治の墓・監獄裏の林」②都市生活を素材とするもの「遊園地にて・乃木坂倶楽部・珈琲店 酔月・品川沖観艦式・動物園にて・虎」③直接的断言命題をテーマとするもの「殺せかし！ 殺せかし！・家庭・火・無用の書物・虚無の鴉・我れの持たざるものは一切なり」④朗吟調のもの「晩秋・地下鉄道にて・昨日にまさる恋

しさの」⑤〈帰郷〉もの「帰郷・告別」⑥その他「漂泊者の歌・新年」

右の分類は必ずしも構成論的見地から為されているわけではない。また、再録詩は「郷土望景詩」系列のものとして分類の対象とされていない。①のものはそれらとまた異質なものとする。更にまた「小解」で朔太郎が「恋愛詩四篇」とするのは上の分類中に仕分されて分類項目に入っていない。また、他に前掲論文で中山智恵子氏が発表順に並べ直して考察をするものなど、少しは見られる。

詩集を「作品」（文芸＝芸術作品）として見ていくかぎり、特別に杜撰なものでない限り詩人に詩集の詩篇排列に構成意識が働かないということはあり得ない。今更にこうした発言がなされなくてはならないところに、詩集を文芸作品として受け止めようとする従来の研究なり評論の姿勢の曖昧さを示すものにほかならない。そして、詩集一個を「作品」として受け止めその抒情（あるいは文芸、世界）構造を見極めようとすれば、当然「構想」論は必須のものとなるはずである。更に付言すれば、仮に制作（あるいは発表）順に作品を並べたとしても、それは直ちに「構成意識」の放棄と見做し得ない。即ち詩篇が作者の時点時点の生ないし生活意識と密着するとき、その詩作は彼の生の軌跡となり、高村光太郎がその詩集『道程』をその制作日を一々記し、ほぼ制作順に並べ「*revulsion*」の後を辿って欲しいと述べたことにその排列の意図は明らかであろう。歌人たちの、特に写生派系の歌人たちが歌集を編年体編むものもおのずから意図を同じうするからである。俳人たちが句集を編集する際に、時に（ただし少数ではない）制作年次を離れて季題別の編集を為すのは、俳句の文芸としての独自のあり方を示唆するものである。なお「構成」論は、詩集を構成する一篇一篇を、あるいは一篇を独立して論ずる場合も、それを文芸作品として扱う場合は必然の過程ないし要素として要請されるものであることは言を俟たない。

(13) 父の死が詩のモチーフとなるのは、散文詩集『宿命』（昭和十四・九）においてで、散文詩「物みなは歳日と共に滅び行く」の〈詩中詩〉というべき形で「父の墓に詣でて」が見られる。別に本稿中に触れている。

(14) ・小松郁子『萩原朔太郎ノート「女人」考』前掲書

・佐藤房儀「なに幻影の恋人を」（『解釈と鑑賞』42巻7号 昭和五十二・6）

(15) 朔太郎は大正十二年八月、伊香保温泉滞在中の谷崎潤一郎を妹二人を同道して訪ねている。谷崎家四人と一緒に榛名山へ遊んでいる。関東大震災の少し前である。翌十三年五月関西旅行の際にも（妹ユキ同道）、震災後関西に下行した谷崎を訪問している。

- (16) 小松郁子『萩原朔太郎ノート「女人」考』前掲書
- (17) 『純情小曲集』『郷土望景詩』の中の「二子山附近」に似た光景がある。「われの悔恨は酔えたり／さびしく蒲公英の茎を噛まんや。／ひとり畝道のあるき／つかれて野中の丘に坐すれば／なにごとの眺望かゆいて消えざるなし。／たちまち遠景を汽車のはしりて／われの心境は動擾せり。」
- (18) 安藤靖彦『萩原朔太郎の研究』前掲書
- (19) 安藤靖彦『萩原朔太郎の研究』前掲書
- (20) 三好達治「詩集『氷島』に就て—萩原朔太郎氏への私信」(『四季』創刊号 昭和九年・11)
- (21) 林浩平氏の論考の教示によれば、田中冬二の「八木節の思出」という文章において、「地下鉄道にて」は朔太郎自慢の詩、会心の作であったことを伝える。(林浩平「萩原朔太郎「郷土望景詩」から『氷島』へ」前掲)なお田中の文章は、未見。
- (22) 『田中冬二全集』(全三巻筑摩書房 昭和五十九—六十)に当たったが未収録。
- (22) 「いかなれば」「いづくんぞ」の両語を手掛かりにするかぎり、『氷島』はまさに「郷土望景詩」の延長線上にあると言える。『純情小曲集』『郷土望景詩』中「いかなれば」を措辞としてもつ詩は四篇(「新前橋駅」「大渡橋」「公園の椅子」)、「いかなぞ」を持つ詩篇は「小出新道」、合わせて五篇に及ぶ。那珂太郎氏は、三好達治が「いかなぞ」の語法を「いく度もくり返される特殊語」と言い、「郷土望景詩」の中の「小出新道」からの「転用」と述べたことに対して、「漢文訓読の常套の範圍内での用法で(略)「特殊語」と言ふには当たらない」として退ける。(那珂太郎『氷島』論のために「国文学」34巻6号 平成元・6)。しかしながら、右注記のごとく「郷土望景詩」にすでに「いかなれば」と併せて多用されている。むしろその詩情の逼迫された状況、憤怒や懷疑に繋がるからこそその多用であることが留意されるべきである。こうした詩情を吐くべき状況は「郷土望景詩」時代の「対郷土(郷里)」に始まったものが、『氷島』時代はそれが全生活状況に及んだことが指摘されるべきである。
- (23) 不来方のお城の草に寝ころびて  
空に吸はれし
- 十五の心  
石川啄木『二握の砂』「煙二」
- (24) 萩原朔太郎は昭和八年六月、個人雑誌「生理」創刊とともに「郷愁の詩人と謝蕪村」の連載を始める。『氷島』の編集に力



を入れ始める少し前のことである。この蕪村論は「生理」の刊行に従って全五回、その後昭和八年八月、十一月、昭和九年五月、十年二月と載せられ、漸次間遠になり「生理」終刊とともに終わる。主眼は春夏秋冬に分った発句の評釈で、評論として「郷愁の俳人」としての蕪村とその俳諧の追及を為した必ずしも質の高いものになりえていない。僅かに蕪村論として理論化された唯一の節「蕪村の俳句について」で「詩人蕪村の魂が咏嘆し、憧憬し、永久に思慕したアイデアの内容、即ち彼のポエジイの実態は何だらうか。一言して言へば、それは時間の遠い彼岸に実在してゐる、彼の魂の故郷に対する「郷愁」であり、昔々しきりに思ふ、子守唄の哀切な思慕であつた」と論を結ぶ。もし蕪村を語りつつ己の文芸の本質を語っているとすれば、稿者のこの箇所の論理は成り立たない。しかし同論「春風馬堤曲」に触れる部分で「英語にスキートホームといふ言葉がある。(略) 葛かづらの這ふ旧く懐かしい家の中で、薪の燃えるストーヴの火を囲みながら、老幼男女の一家族が、祖先の画像を映す洋燈の下で、むつまじく語り合ふことを言ふのである。詩人蕪村の心が求め、孤独の人生に渴きあこがれて歌つたものは、実にこのスキートホームの家郷であり、「炉辺の団欒」のイメージだつた」と、形而下的な低次の「郷愁」論と見えてならない。案外、両親との間に、また妻子との間に「スキートホーム」を形成できなかった朔太郎の希求したものはそうしたものかも知れない。しからば稿者のこの箇所での所論は適うところである。なお、那珂太郎氏の『氷島』論のために(注7)で「久遠の郷愁」(「漂泊者の歌」)について「決して地上の家郷に自分の生れた故郷を求め、それを意味するのではない。(略)『青猫』序における「靈魂ののすたるぢや」「遠い遠い実在への涙ぐましいあこがれ」とまっすぐに結びつくものにほかならない」と書く。それへの私見は別の機会に譲りたい。

(25) 安藤靖彦『萩原朔太郎の研究』前掲書

(26) 例えば、那珂太郎氏の『氷島』論では、「昭和五年の冬」と「一九三三(昭和八年)・一月」の二つのDateの中で苦慮している。「作者の精神はすでに久しく日附のない時間の中にあつたのであり、(略)『氷島』の詩篇については、その展開を制作年次にしたがつて実証的に確認して行く必要を、詩論の上では感じない(略)。／＼とはいへ、読後の印象からすれば、やはりこれは昭和八年一月の作と推定したい。」(那珂太郎『萩原朔太郎私解』「氷島」小沢書店 昭和五十二・6)

(27) この「国定忠治の墓」の冒頭の三行、とりわけ「上州の蚕すでに終りて」の詩句をめぐって、高橋世織氏による次のような言及が見られる。(『氷島』試論―「廻転」のイコノグラフィ―「国語と国文学」第六十三巻五号 昭和六十一年五月号) 冒頭の三行は、単なる冬の荒寥たる寒村の属目風景ではない。「蚕すでに終りて」の詩行は、農村の惨状と共に、「養蚕」

に依存してきた日本農業経済Ⅱ資本主義の構造が破綻したことも説示している。経済の冷え込みは深刻化して、対外的にも「閩を閉」すより他なかったのだ。

右の高橋氏の論の断定的な響きは大変気になるところである。そうしか読めない、そう読まなければならないとの押し付けがましいご託宣のごとき論調である。多少条件付きだが(朔太郎と恭次郎の生活の位相差を考慮する)、早速それに賛同した坪井秀人氏が紹介する萩原恭次郎の詩篇「村の事」(「赤と黒」創刊号 大正十二・1)に、都会人を着飾らせる絹を生産する農民たちが、そういう贅沢奢侈とはまったく無縁に貧困に留まっている現状にプロテストするものである。しかし素直に朔太郎詩「国定忠治の墓」に立ち返れば、私には「単なる冬の農村の風景」(高橋氏の修辞を敢えてして略し、変更もしてある)にしか映らない。農家にとっての養蚕は春蚕、夏蚕、秋蚕等、一年を通して目まぐるしく繁忙なものである。ここは蚕飼のシーズンも終つてやつと農閑期に入った村の静まりとして読むべきではないか。養蚕そのものを廃したのではない。それが対象となる詩への素直な(あるべき)感性、感受性ではないだろうか。昨今、啄木詩・短歌などに対してもそうした過剰な意味づけが見受けられる。「坪井氏のもの」は、「屋上の虎」『氷島』の世界」(『文学』第五十六巻十号 一九八九・10)また『萩原朔太郎論—《詩》をひらく』(和泉書院 一九八九・4)

(28) 那珂太郎『萩原朔太郎私解』 前掲書

(29) 『新体詩抄』には、次のような墓辺墳上の詩が見られる。「グレー氏墳上感懐の詩」「チャールス・キングスレー氏悲歌」

(30) 那珂太郎『萩原朔太郎私解』 前掲書

(31) 坪井秀人氏は「この詩では「虎なり」という念を押しよなルフランにも見られるように、対象との距離は保たれている」と書く。坪井秀人「屋上の虎」『氷島』の世界」(『文学』五六巻十号 一八八八・10 岩波書店) なお、右の論考で坪井氏は、銀座、百貨店の文化地誌的意義を詳しく論じている。

(32) 安藤靖彦『萩原朔太郎の研究』 前掲書

(33) 三好達治「詩集『氷島』に就て—萩原朔太郎氏への私信」 前掲

(34) 「国定忠治の墓」「虎」の二篇の詩については、本論中の解とは別に二篇の詩の相互の補完関係の上から新たな解釈を加えている。

(35) ただし『月に吠える』は、かなりの数の文語詩を含む。文語詩から口語詩への移行過程にある宿命である。同様の現象は

室生犀星の『抒情小曲集』、高村光太郎の『道程』、三木露風の『廃園』等々、決して少なくない事例を見ることができ。

(36) 全集第十五巻掲載の「年譜」に拠る。

(37) この中也の「無題」詩は、詩題を付けかねて「無題」としたのではない。なまじっかな題名では名よく体を表さずとして、むしろ積極的に「無題」とされたものと考ええる。

(38) ここに掲げた各詩集の刊行年を以下に記す。

三好達治『測量船』昭和五 1930、伊東静雄『わがひとに与ふる哀歌』昭和十 1935、室生犀星『抒情小曲集』『愛の詩集』大正七 1918、高村光太郎『道程』大正三 1914、武者小路実篤『無車詩集』昭和十六 1941、千家元麿『自分は見た』大正七 1918、立原道造『萱草に寄す』『暁と夕の詩』昭和十一 1937。